

**ジェトロ ベトナム人材調査**

**歴史と文化から見たベトナム人  
～人材育成と活用への心構え～**

**ベトナム歴史・宗教研究家  
大西和彦 編著**

2011年3月  
ジェトロハノイセンター

## 【目次】

はじめに	***** P1
著者のことば	***** P2
著者略歴	***** P3
第1章 恵まれた国土を持つベトナム人の余裕	***** P4
第2章 道教信仰から見るベトナム人の現実主義	***** P12
第3章 歴史に輝くベトナム人の能力と家族主義	***** P19
第4章 科挙制度とベトナム人の形式主義	***** P27
第5章 ベトナム人と日本人との知識共有の歴史	***** P29
第6章 その歴史と文化を踏まえたベトナム人との接し方(Q&A)	***** P38
むすび	***** P42

## はじめに

昨今の円高や日本経済の低迷を背景に引き続き日本企業の対ベトナム投資への関心は高い。初めてベトナム政府・企業と接する企業からは、法務・労務・税務といった実用的な情報は勿論のこと、ベトナム人・企業、ベトナム人の対日観・他国観、ベトナム特有のビジネス文化、例えば歴史観や文化的背景といった基礎的情報が求められている。さらにベトナムとのビジネス経験のみならず、マネージャーとしての経験が乏しい企業の中堅社員がベトナムビジネスを任される例も見られることから、こうした情報ニーズが高まっている。

ベトナムでビジネスを展開するうえで、ベトナムのワーカー、ビジネスマンや政府関係者との接し方、または経営に直結する人材登用を考えるうえでどのようなことを踏まえておくべきか、それらのヒントとなるような視点や情報を示すことで、人材に係る無用なトラブルを避け、ベトナムにおけるビジネス成功の一助になると考えられるが、多数出版されるベトナム関係のビジネス書籍の中で、これらを網羅したような類書は見当たらない。

そこでジェトロハノイは「ベトナム人材力調査報告書」(2010年3月)を作成し、在ベトナム日系企業から見たベトナム人人材について分析した。その結果、日本人に通じる規律性がある一方、創造性に課題が見られることが定量的に判明した。これを受け、本書では定性的な観点からベトナム人材の育成と活用の心構えについて歴史や文化の背景から読み取ることを試みた。上述の調査と併せてベトナム人材への理解促進に資することを目的としている。

なお本書は、約20年に亘りベトナムへ在住し、ベトナム社会科学院付属宗教研究院客員研究員等を務められ、歴史、宗教に精通している大西和彦氏に全面的に執筆を依頼した。

ジェトロハノイ

## 著者のことば

ベトナムは日本と同じ東アジア文化圏に属し、その国民の主食は米で、それを箸で食べるなど日本人との共通点が少なくない。またベトナム戦争に勝ち抜いた国であることなどから、ベトナム人は優秀で勤勉な国民性を持つとのイメージを日本人は抱いている。そして、日本人はそのようなイメージをもとにして、ベトナム人なら日本人の考え方や行動に共感し理解してくれると思いがちである。しかし、日本人が一方向的にそのようなイメージや思い込みを抱いたままでは、反面においてベトナム人の文化や習慣をあまり深く知ろうとはしないことにも繋がっているようだ。たとえば、次のような例がある。2002年にハノイ市で、日越交流施設創立の記念セレモニーが行われ、幾人かの日本側代表から、いろいろな日本での個人経験を踏まえた祝辞が述べられた。その直後、会場から年配のベトナム人が立ち上がり、こう述べた。

「皆様の御経験やアドバイスを拝聴いたしました。しかしながら、こう申し上げるのは大変恐縮ですが、このような機会に何度も伺ってまいりました皆様の高論卓説は、我が国の実情とかけ離れた御話が多く、残念ながら殆ど応用することが出来ないでおります。

ここで改めて日本の皆様に御伺いたします。日本の方々は、いったい我が国ベトナムの歴史・文化あるいは習慣に御関心を持っていらっしゃるのか、あるいは現在、それを御調べになっっているのか、そこを御伺いしたい。」

今も筆者の耳に残るこの問いかけは、一方向的な思い込みを持ってやってくる日本人に対するベトナム人の意見を代表しているように思われる。つまり日本人がベトナムで効率よく事業を行なおうとする時、ベトナムの歴史と文化に関心を持つことが実は欠くことのできない課題なのである。とりわけ人材育成と活用を行おうとする際、直接対面しなければならないベトナム人の歴史や文化を理解することこそ目的を効果的に達成する重要な鍵になると思われる。

本書は、このようなベトナム人材への理解促進に資することを目的として、筆者の知見や経験を基に記されている。

以上の目的に即し、本書の第1章ではベトナム人の気質を形成した気候と国土について考える。第2～第4章において、そのような背景から醸成され、ベトナム人の思考と行動を決定する現実主義、家族主義、形式主義の3主義に関係する歴史と文化の事例について述べる。さらに第5章で、日越交流の中で生まれた和製漢字熟語という知識共有の歴史を回顧する。つまり、これによってベトナム人と日本人の間には、このような接点の基盤が存在することを再確認したい。最後の第6章では、歴史と文化を踏まえながらベトナム人とどのように接すればよいのかをQ. & A方式で考えることとする。

本書がベトナムビジネスに関わる日本企業の一助となれば幸いである。

大西和彦

## 著者略歴

氏名：大西和彦（おおにし かずひこ）

生年月日：1955年7月17日

本籍地：兵庫県

## 主な学歴・職歴

1984年4月 大谷大学大学院博士後期課程（仏教文化・東洋学専攻）単位取得退学

1992～97年 ハノイ総合大学でベトナム語研修

1985～91年 大阪外国語大学タイ・ベトナム語科非常勤講師（ベトナム文化講義）

1991年 種智院大学宗教学科非常勤講師（東洋史講義）

1997～2001年 ハノイ工科大学日本語センター兼ベトナム語教室教務主任

2002年 ベトナム日本人材協力センター（VJCC）嘱託職員

2003～05年 （財）日本・ベトナム文化交流協会ハノイ事務所長兼日本語センター所長

## 現職

1997年～ 在ベトナム日本大使館婦人会所属ハノイ歴史研究会講師

2006年～ 南潮商業・翻訳会社日本語センター講師

2009年～ ベトナム社会科学院付属宗教研究院客員研究員

## 主な著作

共著『もっと知りたいベトナム』（第2版、弘文堂、1995）

共著『ベトナムの事典』（同朋社・角川書店、1999）

共著『250語でできるやさしいベトナム会話』（白水社、2000）

共著『ベトナムを知るための60章』（明石書店、2004）

専著『ベトナムの道教と民間信仰』（風響社、2011 刊行予定）

## 第1章 恵まれた国土を持つベトナム人の余裕

### 適度な人口と国土面積

現在のアメリカ合衆国を除き、いわゆる経済先進国の人口と地理の条件は、よく似ている。それは人口が1億人前後、国土面積が40~50万km<sup>2</sup>であることである。これは日本や、ヨーロッパ諸国に共通している条件である。またアメリカ合衆国も、はじめは大西洋岸の13州という同様の条件から出発している。

1億人前後の国内人口は、その国内需要によって国内産業の保護育成が可能となる。また40~50万km<sup>2</sup>の国土面積は、交通網などのインフラの整備や維持を十分に行える広さといえる。

反対に、人口が3,000~4,000万人ほどでは、国内産業を維持発展させる国内需要が十分とはいえず、大企業といえども経営が不安定になりがちである。また国土があまりに広大過ぎると、インフラの整備や維持に経費がかかりすぎて、他方面に必要な経費を常に圧迫し、経済発展を阻害するからだ。

この点、ベトナムの人口は約8,500万人、国土面積は約33万km<sup>2</sup>である。上に掲げた条件に照らし合わせれば、この国が発展する基本条件は十分備わっているといえる。

このように、ベトナムの人口規模と国土面積は先進国と変わらないが、さらにベトナム人を左右してきた、3つの特別な条件がある。

それは、①熱帯または亜熱帯気候 ②熱帯産物・鉱物などの資源 ③東アジアの中でベトナムが占める地理的位置である

### 熱帯または亜熱帯性気候と古代ベトナムの人口

地域住民の気質は、その地域の気候に大いに影響されると思われる。ベトナム人の気質を考える時、ベトナムの気候条件をふまえないならぬ。

ベトナム北部は亜熱帯、中・南部は熱帯に属している。北部では短い冬が1~2ヶ月あり、湿度が高いので10℃を切ると底冷えがするけれども、平野部の気温は氷点下にまで下がることはない。このような寒い季節でも、晴れ間がのぞけば、たちまち気温は上昇し、半袖の夏服に着替えなければならなくなる。つまり、おおよそベトナムは年中暑い国であって、日本と鋭く対比される。

日本は11月ごろから寒くなり、春4月になって桜が咲く頃にも「花冷え」と呼ばれる寒さが残る。このように改めて考えてみると、日本では北は北海道から南は鹿児島まで降雪とともに半年近くも冬のような気候が続くのである。

ベトナムで、暑い日が続くということは、日照時間が長いということである。そしてベトナムはモンスーン気候地域でもあるので、全般に雨が多い。日照時間が長く雨が多いというのは、物なりが良くなる基本条件である。物なりの良い土地は、多くの人口を養うことが可能である。このような状況は数千年来変わっていない。

### コーロア（古螺）城—古代のベトナムに大人口が集住していたことの象徴

古代からベトナムで大人口が生活出来ていたことの証拠は、ハノイ市（Thành phố Hà Nội）北郊のドンアイン県（huyện Đông Anh）に今でも残っているコーロア（古螺）城という古代都城の遺跡に良く現れている。

コーロア城（thành Cổ Loa）は、紀元前3世紀なかばから紀元前179年頃にベトナム北部で建国された甌駱国（おうらくこく）の安陽王という王が都として建設したと伝えられている。古い遺跡なので、金色の亀が歩む後に従って築いた、などという多くの伝説に彩られているが、周囲8kmにも達する城壁や水堀は、厳然たる事実として残っている。実はこのコーロア城こそ東南アジアに現存する最古にして最大の都城遺跡なのだ。

周囲8kmの城の規模というものは、日本においては16世紀の戦国時代最大規模の城といわれる小田原城が周囲4里半で約9km、安土桃山時代の最大規模の大坂城の外郭「惣構え（そうがまえ）」が周囲4里で約8kmという規模に匹敵している。

また現存するコーロア城の城壁は3重になっており、その第2重目の城壁が高さ厚さとも最も規模が大きい。これは外壁を越えて侵入した敵を、外壁と内壁の間で包圍殲滅するという防御攻勢の巧妙な戦術思想が内包された構造といえる。このような規模と巧緻な構造は、日本において戦国時代末期に完成された「前後三段の大城」という3重に城壁を構えた巨城の規模とその背景にある戦術構想に相似している。

つまり、日本では16世紀に至ってようやく実現できるようになった大規模で高度な構想によって裏打ちされた建築工事が、ベトナム北部においては約1,800年も前に実現していたことになる。

コーロア城を築くためには約200万m<sup>3</sup>の土石を要すると試算されている。これを言い換えれば、今から2,200年も前に、この規模の建設を可能とする大人口が、ハノイ市近郊に存在していたことになる。

このような大人口は、時代が下ってもベトナム北部において維持されている。それは、中国前漢時代（B.C. 202～A.D. 9）の史書『漢書』の地理志に見える紀元後2年の前漢時代中国における中・南部の主要4郡の戸口と、現在の紅河デルタを中心としたベトナム北部地域に相当する交趾郡（こうしぐん）の戸口を比較すると明瞭である。

### 西暦紀元後2年の中国中・南部主要4郡とベトナム北・中部の人口比較表

郡名	戸数	人口数
長沙	43,470	235,825
零陵	21,092	139,378
桂陽	28,119	156,488
南海	19,613	94,253
<b>交趾</b>	<b>92,440</b>	<b>746,237</b>
九真	35,743	166,013
日南	15,460	60,485

（『漢書』地理志より作表）

比較地域として取り上げた長沙（ちょうさ）・零陵（れいりょう）・桂陽（けいよう）の3郡は、現在中国の湖南省と広東省北部に位置する。これらは、後代の三国時代（220～280）に、漢朝の復興戦略を問う劉備に対して諸葛孔明が勧めた構想「天下三分の計」の中で、最初に確保すべき要地として挙げた荊州（けいしゅう）南部の中心各地である。また南海郡は華南の中心広州だ。

上記中国側4郡の戸数合計は112,294戸、人口合計は625,944人である。これに比べると交趾郡の戸数は92,440戸でやや少ないが、人口数は746,237人と交趾1郡で中国側4郡の総人口を上回っている。また交趾郡の人口に、ベトナム中部の九真郡（現在のマー河[sông Mã]デルタ地域）、日南郡（現在のハーティン省[tỉnh Hà Tĩnh]からクアンナム省[tỉnh Quảng Nam]北部地域）の人口をあわせると972,735人となり、紀元後2年のベトナム北・中部の人口は100万人近い。

つまり、この人口数はベトナムの北部紅河（sông Hồng）デルタ地域に限って



コーロア城平面図 (Buzacier1955 Planche XXIV より作図)

も、古代からこの地域において、いかに多くの人々が食べていけたか、ということ象徴するものである。

### 熱帯産物・鉱物などの資源

前節で述べた古代ベトナムの大人口を支えたのは日照と多雨に恵まれた稲作によるものである。この稲作以外にもベトナムには、同地域で産出しあるいは集荷される付加価値の高い熱帯産物がある。これらの貴重な資源は、古くから中国人に注目されてきた。2～3世紀の中国について記した歴史書『三国志』がある。当時、ベトナムの北・中部は、中国の中・南部を支配した呉の国が支配していた。この呉の皇帝である孫権に仕えて、交趾（こうし）と呼ばれたベトナム北部を統治した交趾太守の士燮（ししょう：在任 187～226）の同書の伝記に「士燮が、孫権に使者を派遣するごとに貢ぎ物にする種々の香料や細い葛（くず）の類は、1000 という単位で送られてきた。明るく輝く真珠、大きな貝、瑠璃（ガラス）、犀（さい）、象のような珍奇なもの、バナナ、椰子、龍眼のような珍しい果物が（孫権のもとへ）毎年贈られてきた。」と、香料からトロピカルフルーツにいたるまでベトナム方面で求められる多種豊富な熱帯産物が記されている。

同じく『三国志』に、交州（ベトナム北部と中部北半）に派遣された刺史（地方監察官）の薛綜（せつそう：？～234）が、皇帝孫権に対して送った交州の情勢を記した報告書にも「（交州には）輝く真珠、香薬、象牙、犀の角、玳瑁（たいまい）、珊瑚、瑠璃、鸚鵡（おうむ）、翡翠（ひすい：鳥の名前）、孔雀のような珍しい貴重品に満ちています。必ずしも田畑からの税収を仰いで中国の利益とする必要はありません。」と、当地では穀物以外にも多様な熱帯産物が豊富に得られることを述べている。

### 香料：シナモン

交趾太守の士燮（ししょう）が貢ぎ物にした熱帯産物の筆頭は香料である。この香料の中でもベトナム産のシナモンに対して古来中国人の強い関心が示されている。

古代仙人の伝記集『列仙伝（れっせんてん）』によると、日南郡象林県出身の桂父（けいふ）という人が、シナモンを食べて仙人になったという。この日南郡象林県とは、今のベトナム中部に位置するクアンナム省（tỉnh Quảng Nam）北部にあたる。西暦 515 年頃に書かれた地理書『水経注（すいけいちゅう）』では、かの桂父はチャンパ（192～1835：インド文化の影響を受けた国家で、ベトナム中部に存在した）の王城である典冲城（てんちゅうじょう）の堀の外に群生したシナモンを食べたと書いている。典冲城とはチャンパ王国の首都のひとつシンハプーラ（Simhapura：獅子の都）のことである。現在はチャーキュウ（Trà Kiêu：茶蕎）と呼ばれ、城跡の丘には教会が建っている。さきの『列仙伝』によると、桂父が食べたシナモン製の丸薬「桂丸（けいがん）」は、広く中国中・南部で用いられた。従って、クアンナム省産シナモンのネームバリューは、すでに古代中国において高かったと思われる。

シナモンはクスノキ科の常緑樹で、漢字名は「肉桂（につけい）」である。日

本では「ニッキ」という呼び名でも親しまれ、京銘菓「八つ橋」の香りとしてよく知られている。

古代中国で「桂丸」が広く知られたようにシナモンの樹皮「桂皮（けいひ）」や枝「桂枝（けいし）」は漢方薬の原料としても有名である。その強壮・発汗・解熱・鎮痛・健胃などの薬効の他に、他の漢方原料の効能を調和させる優れた働きがあるので、シナモンは「漢方薬の王」と呼ばれる。そして、日本の漢方薬店で最上のシナモンを注文するとベトナム産がすすめられるほどベトナム産シナモンは品質が高い。シナモンはベトナム語でクエー（Quế：桂）と呼ばれて各地で採れるけれども、筆者はクアンナム省産のものほど古来由緒のあるものを知らない。

## 黄金

多くの国々に分裂していた中国は、589年に隋（ずい：581～618）によって統一された。この隋王朝の経済白書である『隋書』食貨志によれば、3世紀から6世紀にかけて当時の中国では殆どの地域が銅銭や布を通貨としていた中で、現在の広東・広西にあたる広州と、ベトナム北・中部にあたる交州のみが金と銀を通貨としている。

隋のあとは唐王朝（618～907）が中国を統治し、679年には現在のハノイに安南都護府（あんなんとごふ）という統治機関を置いて、ベトナム地域に集散する産物を管理した。813年に唐王朝が編纂した地理書『元和郡県図志（げんなぐんけんずし）』は、この安南都護府に孔雀・犀の角・鸚鵡（おうむ）・翡翠鳥（ひすいどり）の羽毛そして金が集まったと記している。

938年頃にベトナムは中国から独立したが、中国では依然としてベトナムの金が注目されていた。1178年に記された宋の時代（960～1279）の地理書『嶺外代答（れいがいだいとう）』が、交趾（こうし）と記すベトナム北部地域と、永安州（えいあんしゅう）と記す現在の中国の広西チワン族自治区欽州市との国境地帯の状況を次のように記している。

「永安州は交趾と一つ川を隔てており、鷺鳥や鴨が交趾側の川辺で餌を食べて永安州に帰ってくると、それらの鳥の糞には金が混じっている。我が方（永安州）の川辺ではそのようなことは起こらない。およそ（この地域の）金は鉱山から産出するのではなく、自然に土砂と入り混じっており、小さなものは麦粒ぐらい、大きなものには豆粒ぐらい、更に大きなものは指の先位もあり皆これを生金という。」

つまり、中国国境に面したベトナムには、そこで土ごと餌を取った鳥の糞に混じるほど金が豊富で、しかもそれらは大粒の砂金であったということらしい。

『嶺外代答』は、続けて「官位をもらっている国境地帯の山地民族の首長は、大きな枴に金を盛って家に置き、サイコロ賭博をする時には一回に金一勺（勺は現在の約10gに相当する重量）単位で賭けをする。」と記している。

かなり誇張されている可能性があるとしても、なかなか豪勢な話ではある。少なくとも、先の3～6世紀の貨幣経済を記した『隋書』食貨志の記事から、こ

の12世紀の中国・ベトナム国境の状況を記した『嶺外代答』の記事まで、約1000年にわたって中国人はベトナム産の金を注目していることになる。

1985年にベトナム地質総局地質鉱山院から出版された『地質と鉱山』という書物によれば、『嶺外代答』が記す産金地域に相当するベトナム東北部のカオバン省 (tỉnh Cao Bằng) からランソン省 (tỉnh Lạng Sơn) にかけては、カオラン生鉱構造帯という金を含む鉱脈群が存在する。そして、2009年に筆者はこのカオバン省からランソン省を旅行した際、国境に近い河川で今でも砂金を採集する河船を目撃しているから、現在でも、この地域の金は尽きていないのであろう。

### 東アジアの中でベトナムが占める地理的位置

ベトナムは、ユーラシア大陸の東端、中国とインドという広域の文化・経済圏の間という重要な地点に位置している。さらにモンスーン気候が、この地域の利点を活性化させている。たとえば、ベトナム中部のクアンナム省は、日本人町のあったホイアン (Hội An) の港や、ミーソン (Mỹ Sơn) のようなチャンパ王国の遺跡で名高いけれども、チャンパ王国やホイアンの港が栄えたのは、その地理的条件が優れていたからである。

クアンナム省を含むベトナム中部は、インドシナ半島東岸部がS字状に曲がって張り出した部分にあたる。帆船時代、毎年10月から3月頃に東北の季節風が吹き降ろすと、中国方面から海に浮かんだ船は、風と潮流に乗って、このあたりに着く。反対に4月から9月頃にかけて西南の季節風が吹き上げると、インド方面からクアンナムの地に来た船は風と潮流に乗って中国南岸に到着できる。この地域がいわゆる「海のシルクロード」の重要な場所であるのは、このためである。

## 第1章のまとめ：豊かな生活環境が形成した3主義

ベトナム人の背景には、熱帯・亜熱帯の気候による食料生産性の高さ、付加価値の高い熱帯産物や鉱物資源にめぐまれていること、インドと中国に挟まれたユーラシア大陸東端の海辺に位置するという周辺地域から常に重視される立地という地理的条件に恵まれた居住地域がある。

気候条件において単に冬が短い、無いということだけでも、人の生活には重要な意味を持つ。極端な話、人は飢えても容易に死なないが、これに寒さが加わるとあっけなく死んでしまう。翻って日本人の勤勉さ、周到さ、常に思考を深化させる、という性質は、6ヶ月近くの過酷な冬に備え続けてきたために生み出されてきたものに違いない。

ベトナムの気候を含めた地理的特性から恵まれた生産性と高さは、既に古代ベトナム北部の大人口集住に既に現れている。しかし、この「物なりの良さ」は、ベトナム南部においてより強く感じられる。2007年、筆者はホーチミン市 (Thành phố Hồ Chí Minh) から西へカンボジア国境に近いアンザン省 (tỉnh An Giang) まで5時間の車の旅をしたことがある。途中、行けども行けども、道路の両端から水田が視界から消えることは殆どなかった。その水田からは時として魚が飛び跳ねるのも視認した。道路沿いの街路樹はバナナとココ椰子である。

そして、まばゆい日差し。目的地のタット山バーチュアスー神社 (đền Bà Chúa Xứ, núi Thất Sơn) において、参拝者は大きな金属の盆に、日本で買えば一つでも高価そうなトロピカルフルーツを山盛り供えていた。しかし、参拝して 30 分も神前に供えると、祭壇下の巨大なゴミ箱に惜しげもなく捨ててしまうのには驚いた。ここには、日本人には想像しがたい豊かさに裏打ちされたベトナム人の余裕というものが感じられる。

一方、これらの地理的条件は、それぞれが独立して価値を発揮するものでは必ずしも無い。たとえば先に述べたクアンナムの地が「海のシルクロード」の重要な場所であるのは、季節風による海上交通の中継点という要素もあるが、各地の商人がこの地に集まって来たのは、ここに魅力的な熱帯産物があったからでもある。中でも注目されたのは本章で取り上げた香料のシナモン（肉桂）である。

しかし、現在、クアンナム省のシナモンは、その南部奥地のチャーミー (Trà Mỹ : 茶美) という地域で採取されているが、いかに高品質なものでも多くは未加工品として中国・シンガポールに安い値段で輸出されるのみである。ベトナムの伝統薬トウオックナム (thuốc Nam : 南薬) では、シナモンの性質は体を温めるので、暑いベトナムではその使用に制限があるようだ。そのためか、薬剤の他、ベトナム国内ではシナモンは靴の臭い消しの中敷 (なかじき)、その皮で作られた爪楊枝入れや茶器が土産物として利用される。また桂皮が丸まった形を真似たバインクエー (Bánh Quế) という巻きせんべいもハノイのスーパーで見かけるが、パッケージが地味なため目立たない存在である。産地が近いのにホイアンの土産物店でも、シナモン製品を見かけるのは稀である。

クアンナム省は、東西経済回廊や、ハイバン (Hải Vân) トンネルの完成で、再びアジアの交通の要衝としての地位を高めつつあるが、古来この地を繁栄させた要因の一つである地域産品シナモンの活用にはあまり関心が払われていない。

2005 年に、在ベトナム日本大使館の要請を受けて、筆者はホイアン市でクアンナム省のシナモンの高い価値と、その活性化を講演したことがある。講演中、参加者からの質問もなく反応は今ひとつであった。ただ、講演後に出席者のなかから少なからぬ人数のベトナム人ガイドの方が、詳細を尋ねて下さったのは救いであった。しかしながら、地元のガイドでも当地のシナモンの由緒や価値を初めて聞いたということに衝撃を受けたのを鮮明に覚えている。

恵まれた環境の中で永住すると、特産品の活用などを余り深く考えることがなくなるものなのであろう。

このように、冬が短いかあるいは全く無い地域が多く、資源に恵まれ、周辺地域から関心や援助を受けられるというベトナムの地理的状况は、その地域住民に「切羽詰った」思いというものを抱かせることが少なかったように思われる。そして彼らは、過去や未来を憂えず、個人の家族のみで生きようと、全ての物事に対して形式が整うことを第一とする。日本人から見れば、これらは真に余裕のある思考と行動である。このようなベトナム人の行動や思考は、以下の 3 つの「主義」にまとめられる。

- ① **現実主義**：過去や未来を憂えない。
- ② **家族主義**：自然に恵まれた生活環境によって必ずしも社会組織にたよらずとも個別の家族だけでも生きていける。そのため、日本人が「世間様」と良く言う既に擬人化されるまでになっている個人の社会責任や共通の社会規範が比較的希薄であること
- ③ **形式主義**：物事を徹底的に追求して、生産効率、精度、品質を高めたりするよりも、「形」が整っていれば、まずよしとする。

## 第2章 道教信仰から見るベトナム人の現実主義

### ベトナム人の道教への指向

既存のガイドブックや概説書が書いているように、ベトナム人の多くは仏教を信仰し、また彼らの道德規範には、長幼の序などの儒教が影響見られる。

しかしながら、筆者の見るところでは、ベトナム人は特に意識してはいないのであろうが、歴史的文化的に実際の信仰の中心は道教である。道教は不老長寿など現在の幸福を追求する宗教であり、護符や祈禱を多用する。そして、ベトナム人の信仰心を集めている道教は現実主義なのである。

ベトナムにおける伝統的な仏教行事であると思われる盆行事の歴史と現在の正月行事という最もポピュラーな年中行事を通じて、このことを見てみよう。

### 道教起源のお盆：中元節行事の歴史から見る現実主義

陽暦の8月、ベトナムでもお盆「盂蘭礼」(レー・ヴー・ラン：lễ Vu Lan)を迎える。この仏教行事は、道教行事の「中元節」(テト・チュングエン：tết Trung Nguyên)とも習合しているが、ベトナムでは「謝罪亡人日」(ガイー・サートイボンニャン：ngày xá tội vong nhân)ともいう。陰暦7月15日にmã(マ〜)と呼ぶ紙銭などを供えて先祖を偲(しの)ぶ。この祖先信仰は、道德哲学でもある儒教の宗教としての側面を示すものである。従って盆行事には、元来、仏教・儒教・道教の三つの概念が重なり合っている。

しかし、ベトナムの場合、この行事の歴史をながめてみると、実は道教の年中行事としての性格が強いものであった。

### ベトナムの年代記に現れる中元節は楽しい祝日であった

ベトナムの年代記『大越史略(だいえつしりゃく)』に中元節が初めて現れるのは李朝(リーちょう：1009~1225)第4代皇帝の仁宗(じんそう：在位1072~1127)の太寧元年(1072)の「秋七月(中略)聖宗を葬る。群臣は中元節祝賀の表文をささげた。」という記事である。ここで驚くのは、仁宗の父である李朝第3代皇帝の聖宗(せいそう：在位1054~1072)の葬儀の後にもかかわらず、仁宗の臣下たちは中元節を「祝賀」していることである。そして盂蘭盆について触れていないことにも注意すべきだろう。別の年代記『大越史記全書(だいえつしきぜんしょ)』に初めて中元節と盂蘭盆の記事が現れるのは、仁宗の会祥大慶8年(1118)の「秋七月中元節、卓を執ることをやめる。霊仁太后(れいじんたいこう：1044~1117)の盂蘭盆の日にあたるからである。」という条文だ。ここに見える霊仁太后とは前年に亡くなった仁宗の皇后である。

「卓を執ること」とは、「テーブルを執り行う」という意味に解釈できるが、何のことかわからない。しかし、どうも宴会を開くことらしい。それは『大越史記全書』の2番目の中元節記事である李朝第5代皇帝神宗(しんそう：在位1128~1138)の天順元年(1128)の条文に

「秋七月中元節、帝は天安殿に出御され、群臣は祝賀を申し上げたが、仁宗に盂蘭盆を薦めるために宴礼は設けられなかった。」

と李朝時代における中元節の行事をより詳しく描写した記事と比較できるからだ。この記事は、神宗が中元節に際し臣下から祝賀を受けながら、前年の天符慶寿元年(1127)12月に崩御した父の仁宗に盂蘭盆の供養を行うので、宴会は取りやめたことを明らかに記している。

この神宗時代の中元節記事から推察すると仁宗時代までは道教行事の中元節のみがあり、しかも本来は祝賀の日で宴会を開いていた。それが仁宗の晩年に仏教行事の盂蘭盆が追加されたために「卓を執ること」つまり祝宴を取りやめたというふうに見える。

従って、李朝時代の中元節とは先祖を供養する、いわばシンミリとした行事ではなく、本来は祝辞を述べ宴会を開く華やかな祝日であり、後世の中元節：盂蘭盆とはずいぶん状況が違っていたようだ。

#### ベトナムの中元節は道教起源

このような李朝時代の中元節について記したベトナム側年代記の記事に相応する中国史料がある。それは1175年に南宋(1127~1279)の文人官僚范成大(はんせいだい：1126~1193)が著した『桂海虞衡志(けいかいぐこうし)』という現在の広西チワン族自治区からベトナムにかけての地誌である。そこに、当時のベトナムにおける年中行事を、

「正月四日、酋長は牛を殺して臣下にふるまう。七月五日は重要な節句として人々は互いに祝いあい、官僚は奴隷を酋長に献上する。翌日、酋長は宴を開いてむくいる。」

と描写している。7月5日に、酋長つまり宋朝中国から見た李朝の皇帝に臣下が奴隷を献上し、翌6日には皇帝が宴会を開いて臣下に返礼する重要な節句が描写されているのである。

ここには異なった祝祭日の習俗の重なりが見られる。まず後述するように元は7月5日に行われていた中国伝来の中元節の概念が、奴隷のやりとりをするようなベトナム独自の風習と重なっていたらしい。続いて物故者を供養する盂蘭盆の概念が加わったようである。

李朝の最末期にあたる1225年に南宋の趙汝适(ちょうじょかつ：1170~1231)が著した南海諸国の地誌『諸蕃志(しょばんし)』は、李朝の年中行事を、

「正月四日、酋長は牛を殺して臣下にふるまう。七月十五日は大事な節句として人々は互いに祝いあい、官僚は奴隷を酋長に献上する。翌日十六日、酋長は宴を開いてむくいる。」

と記している。記事の内容は『桂海虞衡志』と殆ど同じだが、7月の祭日が

5日から15日に変わっている。この部分に対する馮承鈞（ふうしょうきん：1887～1946）氏の『諸蕃志校注』など従来の『諸蕃志』に関する研究では、単なる「衍字（えんじ）」つまり文中に誤って混入した余分な字とされてきた。しかし、先に掲載したベトナム側の史料と考え合わせると、もともと中元節と近い期日に開かれていたベトナムの7月5日の祭日が、『諸蕃志』が著された李朝末期の頃までに孟蘭盆の期日である7月15日と重なって行われるようになったと筆者には思われる。

そして、『桂海虞衡志』には当時のベトナムの習慣として「年中行事として祖先を供養しない」という記事がある。後代の『諸蕃志』では「年中行事として仏は供養するが、祖先は供養しない。」と記していて、後者は仏教の普及を述べているが、どちらも祖先を供養しない、ということでは一致している。

以上の中国史料とベトナム史料に記された李朝時代の状況を考えると、李朝の仁宗が皇后に、神宗が父の仁宗に対して孟蘭盆の供養を行ったのは、かなり新しい概念の行事であったようである。

では『桂海虞衡志』に記された「7月5日」の大節とは、何だろうか？  
筆者は、これこそ7月15日の仏教行事である孟蘭盆会と混じってしまう以前の道教徒の祝日である中元節と考えている。唐代（618～907）に活躍した仏教僧法琳（ほうりん：572～640）は著書『弁正論（べんしょうろん）』の中で「考えてみると、（中略）道教徒にはただ三元節があるのみである。（中略）彼らは正月五日を上元節とし、七月五日を中元節とし、十月五日を下元節とする。これらの日になると道士（どうし：道教の戒律を受けて道教の儀礼などを執行する宗教職能者）は寿命を延ばし、利益が増すよう神々に祈願する。七月十五日（孟蘭盆会）は道教徒の節句ではないのだ。」と述べている。

この唐代の道教は、天師道（てんしどう）と呼ばれていた。これは天師と呼ばれる張陵（ちょうりょう：？～177）という人物が中国で創始した道教の教派である。天師とは天になりかわって地上を指導する先生という意味である。ちなみに天師道の道士である陸修静（りくしゅうせい：406～477）が著した『陸先生道門科略（りくせんせいどうもんかりやく）』という道教徒の戒律を定めた書物に、これらの日には飲酒肉食や喧嘩雑談を慎まなければならない、と記されている。しかし、このような戒めがあることは、実際には上記の節句において、このような一種の宴会騒ぎが行われていたことを示している。

天師道は、その熱心な信者で西暦403年から広州刺史（こうしゅうし）として中国南部からベトナム北・中部を実効支配した盧循（ろじゆん：？～411）により、ベトナムの平野部から山間部まで広められた。ベトナムの李王朝も、都の昇龍（タンロン[Thăng Long]：現ハノイ市）に唐の都長安（ちょうあん）にあるのと同じ名前の太清宮（たいせいきゅう）という道教寺院を建立するなど唐の道教つまり天師道を継承している。従って、李朝の人々が中元節を重要な節句として7月5日に宴会を開くのは、天師道の年中行事の継承に他ならず、李朝期ベトナムの中元節は道教思想を起源としていたのである。

## 後の時代も中元節の「宴会」は続いた

李朝の次の陳朝（チャンちょう：1225～1400）になると祖先供養を含む中元

節：孟蘭盆の行事が社会に普及していたらしく、1340年頃に完成した現存最古のベトナム人著書である黎崱(れいしよく)の『安南志略』に「中元は孟蘭盆会を結んで亡者を供養し多大な費用を惜しまない。」とある。

しかしながら、中元節行事における伝統の「娯楽性」は、なかなか抜けなかったようで、1884年編纂の阮朝(グエンちょう：1802～1945)官選年代記『欽定越史通鑑綱目(きんていえっしつがんこうもく)』の光順6年(1465)の条文中に、黎朝(レーちょう)前期(1428～1527)第5代皇帝聖宗(在位1460～1497)が当時の中元節の習慣に対して、

「喪中の家で仏教に惑わされるものがあり、中元を迎えるたびに祭壇を設けて祀っては多くの酒肴を供えて客を招き、歌・滑稽な芝居や曲芸などまで催し、悲しみの言葉を告げて死者を祀ることに託しながら、実際は戯れの場所となっている。以後、喪中の家は礼法を守り悪習に陥ってはならない。(中略) 違えるものは重罰に処す。」

と強い憤りをこめて習慣の矯正をはかろうとしたことが記録されている。

黎朝の聖宗は儒教を振興した名君として有名であり、儒教の重要な要素である祖先崇拝を、もっとまじめに行ってもらいたかったようである。

その後、福建から拙公禅師(せつこうぜんじ：1590～1644)という仏僧が、祀る者が無い死者を供養する施餓鬼の儀礼書『水陸諸科(すいりくしよか)』をベトナム北部で広めた。この施餓鬼供養はベトナムではチュンシーン(Chúng sinh：衆生)といい、17世紀からベトナムでは天災が続き多くの犠牲者を出して社会不安が広がった状況にも合致した。

どうやらベトナムでは施餓鬼供養が普及した頃から、「娯楽性」の少ない現在のようない盆行事が形成されたようだ。

このように、ベトナムのお盆は、その歴史をみると現在のようい儒教の一つの骨格である祖先信仰や、それに影響された仏教の祖先供養としての内容や考え方で行われている現在の状況と過去とはずいぶん異なっていた。もちろん故人を慕うのは万人共通の感情である。しかし、元来情緒の豊かなベトナム人は、帰らぬ故人を偲ぶこと自体に感情が激して耐えられないのだろう。たとえば、ベトナム人が葬式を行う時に、太鼓やラッパのような楽器で常に音楽を奏するのは、そういう悲しみの感情を緩和するためだからである。ただ、そのような事情があるにせよ、ベトナムの盆行事は娯楽性の高い行事が何百年も継続してきた。それは基本的にベトナム人の現実主義に合致した道教の中元節行事に即した年中行事の一環であったからである。

### 正月行事の内容から見る道教の普及

ベトナムの多数民族キン族の正月はテト(Tết：節)と呼ばれる。彼らの伝統行事は陰暦に従って行なわれ、陽暦で1月か2月頃に正月を迎える。テトは正式にはテトグエンダーン(tết Nguyên Đán：元旦節)といい、大晦日と元日から3日までが標準的な祝日である。しかし、その前後にも旧年を送り新年を迎え

る行事もある。

### カマド神送り

陽暦の年が明け、1月も半ばになると人々は正月の準備で忙しくなる。財禄を象徴する縁起物の金柑の植木や厄除けの桃の枝を買い求め、墓参りや祖先を祀る祭壇バントーザーティエン (Bàn thờ gia tiên) の清掃を行なう。そして、人々の生活が本格的に正月行事へと切り替わる日が陰暦 12 月 23 日のカマド (竈) 神オンターオ (Ông Táo : 翁竈) の送神日である。ベトナムではカマド神は1女2男の3神があり、男神は女神ティニー (Thị Nhi) の前夫チョンカオ (Trọng Cao) と後夫ファムラン (Phạm Lang) とされる。カマド神は土地神の土公 (トーコン : Thổ Công) とも同一視され、家を魔物から守る役割もある。

カマド神は 12 月 23 日に天に登り、道教の天の神である玉皇上帝 (ぎょっこうじょうてい) に旧年中の人間の善悪を報告し 30 日に戻るといふ。そのためこの日、北部の民家では、カマド神を象徴した紙製の冠3個と長靴1対、カマド神3柱が天に登るため相乗りするという生きた鯉を1匹供える。礼拝後、鯉は池や川に放たれ冠や靴は燃やされる。

### カマド神送りの後、桃を飾る風習

北部では、家庭を守るカマド神が留守の間、桃の花を飾る。桃の開花には気候が暑すぎる南部では、かわりにホアマーイ (Hoa Mai) という黄色い花を飾るが、これは桃の間に合わせにすぎない。

この桃は道教とかかわりが深い植物である。桃は道教が目指す超人である「仙人」が超能力を得る樹木であり、果実だからである。道教のお札は、桃の木から作られる。これは桃が邪気を祓い不老長寿を与える植物と考えられているからである。

日本においても中国と同様、古くから桃には邪気を祓う力があると考えられている。『古事記』の記載では、国産みの神である伊弉諾尊 (いざなぎのみこと) が、亡くなった妻の伊弉冉尊 (いざなみのみこと) を黄泉 (よみ) の国に訪ねた時、襲ってきた鬼女、黄泉醜女 (よもつしこめ) に桃を投げつけた。桃は山や川に変わって鬼女の追跡をさえぎったという。また、『桃太郎』は、良く知られているように桃から生まれた桃太郎が鬼を退治する話であり、桃の持つと信じられる厄除けの機能が生み出した話である。3月3日の桃の節句は、現在は女兒の華やかな祭日となっている。しかし、本来3のような奇数は陽気を表し、3月3日のように陽気が重なると万物のバランスが不吉であると考えられた。季節の変わり目とも重なり病気になりやすく、特に乳幼児死亡率の



祖先を祀る祭壇に貼られた道教の護符「鎮宅符 (ちんたくふ)」(ハノイ市の民家)

高かった往昔には、この3月3日のような陽気が重なる時期は大変恐れられた。それで子供の身代わりになる雛人形と、病気の原因となる鬼や魔物から子供を守るために桃を飾ったのである。

### 大晦日の行事 - 年神「行謹（こうけん）」の送迎 -

大晦日の夜、ハノイ市の路上に小さな机や椅子が持ち出され、その上に紙製の冠と長靴が飾られ線香や供物が置かれる。これは行謹（ハインケン：Hành Khiển）と呼ぶ新旧の年神を送迎する祭壇である。この神も玉皇上帝の部下の道教神であって、十二支それぞれに行遣とその副神の判官が1柱ずつ配されて該当の年の吉凶を司り、大晦日に交替すると信じられている

この「行謹」という神名から想起されるのはベトナム歴代王朝の官制に見える同じく「行遣」（こうけん）という官名である。ベトナム歴代王朝の制度史『歴朝憲章類誌（れきちょうけんしょうるいし）』によれば、この官名は宦官（かんがん）の専門職であって、陳朝期（1225～1400）から一般の官吏も就任できるようになった頭職である。後黎朝期の職務内容は裁判訴訟記録を扱うものであるが、それ以前の職務は明確ではない。恐らく、元来「宦官が行き遣わされる」という官名であることから、皇帝の命令を直接末端組織に伝える役割があったのであろう。このような皇帝－宦官という朝廷組織と職能が、玉皇上帝－行謹という神界の階層組織に反映されたものと考えられる。以上のようにベトナム王朝制度や官職名から考えても、やはりこの年神の元の名は「行遣」が相応するように思われる。

なお「行謹」の「謹」は「災い」「責める」などの意味があり、全体として「災いや責めを行なう」という意味になる。これは、この年神の性格に起因する字の変化であろう。民族学者トアン・アイン氏は「俗信では多年にわたり天災・兵乱・水害・火災が起きるのは、全ての人々に罪があるので行謹大王が人間社会を罰しているためである。」と述べており、この年神には元来厄神の性格があるらしい。

この疫病神の性格は、行謹に「天瘟行兵之神（てんおんこうへいのかみ）」「五瘟行兵之神（ごおんこうへいのかみ）」などの別名があることでも確認できる。「瘟（おん）」とは往古ベトナムでは伝染病のペストとコレラを意味する言葉である。医療事情が整わなかった時代、高温多湿のベトナムでは疫病が発生しやすかった。その害を神々の仕業と考え、その神々を年末年頭に祭祀して病害の発生緩和を祈ったのがこの年神の送迎儀礼に係わっていると思われる。

### 1月15日の星祭り

ベトナムには「1年中のお祈りも1月15日には及ばない」という諺がある。これは正月3ヶ日以降、民間信仰上最も重視される日が1月15日であることを示している。この日は道教神で天界を主宰し人に福を授ける天官大帝（てんかんたいてい）の誕生日とされるので、凶星の厄を禳（はら）う星祭り：ザンサオザーイハン（Dâng sao giãi hạn）が行なわれる。ザンは「捧げる」、サオは「星」、ザーイは「解く」、ハンは「厄運」の意味であり、「星に供物を捧げて厄運を解除する」という意味である。

俗信では人の運命を毎年順番に支配する本命星という九つの星がある。それは太陽・月・木・火・土・金・水の7星と太陽の軌道黄道と月の軌道の2交点に創造された計都（けいと）と羅睺（らごう）という空想上の2星である。人の年齢によって巡り合う星は異なるが、諸星には吉凶があり、計都・羅睺・金星のような大凶星が巡る年にその厄を祓うのを目的とする。

1月15日までの数日間、仏教寺院の須弥壇の前や民家の庭先に、星を象徴した紙製の冠と靴、この儀式に係わる神々の紙製の位牌を安置した祭壇を設け祈祷が行なわれる。これら諸神は玉皇上帝や行譴などの道教神でありこの儀式も道教の影響が強い。また厄払いを願う人々の姓名や本命星の名を記した紙人形を用意して燃やす。この人形は願主に代わり天界で厄払いの祈願をすると信じられている。この行事は15世紀には宮中の道教儀礼として行なわれ、17世紀までに一般化している。

正月・テトはベトナム・キン族にとって1年で最大の祝日である。さらには1年で最も重視される民間信仰儀礼が行なわれる。この時期には、祖先を祀る祭壇で礼拝したり、墓参りもする。しかしながら、年末行事の開始を告げるカマド神送り、カマド神送りの後に桃を飾ること、大晦日の行譴という道教神の送迎、年始の星祭り、というように正月の主な行事は全て道教に由来するもので終始することに注意しなければならない。

ベトナムにおける正月行事の内容は、ベトナム人の習俗に道教がいかに強い影響を与えているかを象徴するものである。

## 第2章のまとめ： 伝統宗教を覆う道教信仰は現実主義を象徴

以上のように、伝統的な年中行事を見直した時、ベトナム人の宗教人口として最も多数を占める仏教徒の重要な行事であり、儒教の祖先崇拜とも習合した盆供養は、実は長らく道教の中元節行事の内容に従っていたのである。さらにベトナム人にとって、年中行事の中で最も重要な正月行事も、道教に由来する行事に終始している。

これら二つの事象は、ベトナム人の精神世界の中には、仏教や儒教よりも道教の影響が色濃く存在してきたことが見えてくる。つまり、過去や未来よりも現在の幸福を第一に求める道教信仰が、ベトナム人の生活心情に最も合致していることに他ならない。このことは、ベトナム人が何事も今の自分や家族にどういう意味があるのかを第一に考える現実主義者であるということを実に物語っている。

### 第3章 歴史に輝くベトナム人の能力と家族主義

#### やる時はやるベトナム人

ベトナム人は、長らく中国から、ついでフランスや旧ソ連から文化や技術を学び、現在も日本や欧米諸国から技術移転を受けている。これは反面、あたかもベトナム人は他国との文化交流上、常に受身で、自ら発信する国際社会で普遍的な能力に長けていないような感じさえ覚える。しかしながら、歴史上、ベトナム人の能力は幾度か大きく開花している。それは、15世紀の都城建築技術と火薬兵器改良、現代における対空ミサイルの運用などである。

反面、このようなベトナム人の優れた能力の発露を見る時、改めて彼らの家族主義というのが明らかになるようにも思われるので、以下詳述したい。

#### 中国・北京を造ったベトナム人

15世紀のベトナムに、阮安(げんあん: Nguyễn Yên : ? ~ 1456)という優れた建築家が現れている。彼と彼が率いるベトナムの技術者たちこそ、中国の明朝(1368 ~ 1644)の都である北京を建設・補修したのである。

15世紀初期のベトナムは、その北方中国からは海外にまでその覇権を及ぼすことを目指す明の永楽帝(えいらくてい : 在位 1402 ~ 1424)の外圧が現われ、南方からは長らくベトナム人と対抗し、14世紀後半から幾度も北侵を繰り返すチャンパ王国の脅威にさらされていた。

その時、ベトナム陳朝(1225 ~ 1400)の武将である胡季犛(こきり: Hồ Quý Ly: もとは黎季犛[れいきり: Lê Quý Ly]: 1336 ~ 1407)が活躍した。陳氏の外戚ともなった胡季犛は陳朝朝廷の実権を握り、1400年には陳朝最後の皇帝である少帝から帝位を奪った。同年に胡季犛は位を子の胡漢蒼(こかんそう : Hồ Hán Thương : 在位 1400 ~ 1407)に譲ったものの、上皇として権勢を振るった。胡季犛は胡朝(1400 ~ 1407)を開き、都を東都(現ハノイ市)から故郷の清化(タインホア: Thanh Hóa)に移し西都と命名した。

しかしながら、1406年に海外伸張を企てていた明の永楽帝は、陳朝皇帝から位を奪った胡季犛を打倒し、陳朝の回復を名目に大軍を派遣してベトナムに侵攻した。

翌1407年に、胡朝の多くの技術者が捕獲されて明に送られている。一般に工匠と呼ばれていた彼らの中に阮安がいた。明の朝廷に宦官として仕えさせられた彼は、明の都城、宮殿などの大規模建築工事に異能を発揮した。

明の年代記『明史(みんし)』巻304、宦官金英伝の付記に、

「阮安は交趾の人である。優れた考えの持ち主であり、成祖(永楽帝)の命令により、北京の城、宮殿および官庁を造営した。目で見ただけで測量することができ、それは実際に図ってみると機器による実測と全て符合していた。それで工部(現在の建設工業省に相当)は、彼の測量結果に従って施工するだけであった。正統年間(1436 ~ 1449)、彼は北京の主要な三つの宮殿を再建し、揚村河の河川工事をして、両方の工事で共に功績があった。景泰年間(1450 ~ 1456)、張秋河の河川工事を行

っている最中に亡くなったが、身には僅かな金も帯びていなかった。」

上記のように『明史』には阮安の異能ぶりが記されている。ただこの記述の内容は簡潔すぎるくらいがあり、ここでは正統年間における彼の功績について「彼は北京の主要な三つの宮殿を再建」としか述べていない。

そこで、この正統年間の阮安の事跡について、より詳細な明の年代記『明実録（みんじつろく）』を見ると、正統4年（1439）4月に北京の九つの城楼を、正統6年（1441）10月には、北京の紫禁城において奉天・華蓋・謹身の3宮殿以外にも乾清・坤寧の2宮殿を完成させている。さらに特筆すべきは、それまで外面はレンガであるが内面が土塁であったため崩落しやすかった北京の城壁を、正統10年（1445）全てレンガで再建している。

阮安が宦官として明にいつから仕えたのかははっきりしないが、ベトナムの年代記『大越史記全書』開大4年（1406）、12月2日の条に、明軍が胡朝期のベトナムに侵攻して、東都（現ハノイ市）を陥落させた時の記事に「明の人々が東都に入り（中略）、多数の少年を去勢し、（中略）金陵（現中国の南京市）に送らせた。」とあるので、この前後に阮安も去勢されて明に送られたと考えられている。

上述の『明史』の記事は、景泰年間に阮安は河川工事の途中で亡くなったが、ほとんど蓄えも無かったと伝えている。これは財をむさぼりがちな宦官には珍しいことで、そのため彼の伝記にもこのような逸話が加えられたのであろう。巨額の建設費を扱う重要な地位に就きながら蓄財などの他事に恬淡（てんたん）とし、優れた能力を大規模な土木工事を相次いで完成させていくという、胡朝期ベトナムの専門家の気質がここにかがえる。そして、明の諸皇帝の委託に応えた高度な建築技術が、阮安のような胡朝期の技能者に備わっていたことは、彼らの技術によって築かれたベトナム胡朝城の建築技術の高さを再評価する視点となると思われる。

### 明で活躍したベトナム人技術者たち

永楽帝によって、明に送られた胡朝期ベトナムの技術保持者は、この阮安だけではなく、他に8,000人近くもの各種工匠がいた。『明実録』永楽5年（1407）6月23日の記事に、

「交趾総兵官新城侯張輔が送った交趾の諸業種の工匠七千七百人が（南）京に到着した。」

とあり、胡朝期ベトナムへの明の遠征軍総司令官である張輔が、占領後間もないベトナムの地から中国へ送った工匠が、その妻子とともに金陵に到着している。そして、永楽帝は、明の官庁に彼らの衣食住や医療の世話をするように命じている。このように手厚い保護が加えられて7,700人もさまざまな技能を持つ工匠が、都の金陵（現中国の南京市）に送られたのである。

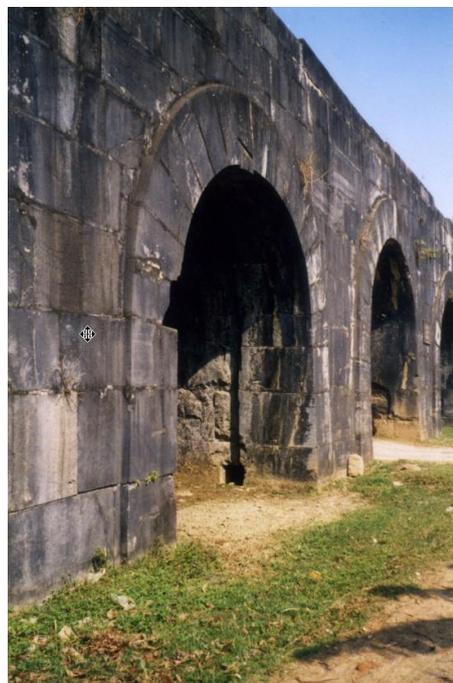
ベトナム側の史料でも、『大越史記全書』の興慶元年（1407）7月の記事に、明軍が多数の胡朝の人材を搜索して「続々と金陵に送って官職を授けた」と記

しているが、「官職を授けた」と記されているので、ベトナム人技術者は奴隷視されたのではなく、ベトナム人でありながら明の技術官僚として扱われたのである。そして、それら胡朝の人々の中に「磚巧香巧等の科(技能の高いレンガ工の部門など)」とあって、レンガ工等の優れた建築技術者が含まれていた。

さらに永楽5年(1407)以降も、胡朝の工匠が引き続き金陵に赴いている。『明実録』永楽11年(1413)5月26日の条に、

「交趾の工匠百三十余人、妻子をともな  
って京に到着した。(永楽帝)は、官庁に  
命じて鈔(しょう：紙幣)・米・衣服・  
居室を支給し、病人には医薬を与えさせ  
た。」

とあり、新たに130余名のベトナムの工匠を招いているのは、永楽帝をはじめ明朝が、これらベトナムの工匠の技術に期待するところがいかに大きかったかを物語っている。恐らく、これらの胡朝期ベトナムの工匠たちは、阮安の指揮のもと、明の大規模な土木建築にそれぞれの技能を発揮したものと想像される。



胡朝城の南門

### 胡朝城—現在に残る胡朝期建築技術の成果—

現在のベトナムにも、阮安が活躍した時代の建築技術の成果が残っている。それは、かつて西都と呼ばれた15世紀の都城遺跡である胡朝城(タイン・ニャー・ホー：Thành Nhà Hồ)である。

ハノイ市から国道1号線を車で南下すること約100km、3時間ほどでタインホア省(tỉnh Thanh Hóa)の省都タインホア市(Thành phố Thanh Hóa)に着く。そこから国道45号線で西北に進むこと約50km、1時間半ほどで胡朝城の壮大な遺跡が現れる。胡朝城は、東西約877m南北880mのほぼ正方形をしており、石灰岩の切石を積んで造られた城壁で囲まれている。そして東西南北の各城壁の中央にはそれぞれ城門がある。

胡朝城は、その堅固な石の城壁に代表されるベトナムでは他に類例を見ない優れた特色がある。ベトナム美術史の代表的なフランス人研究者の1人、ルイ・ブザシエ氏が、

「この城塞は、規格も石組も極めて完璧な石灰岩の巨大な石材を用いた(古代ベトナム城塞建築の)唯一の事例である。」

と評価しているように、胡朝期の石造建築技術は、ベトナム建築史の中でも

傑出した存在でありながら、その遺構はベトナムにおいて唯一西都の胡朝城が残るのみである。しかしながら、この胡朝期ベトナムの優れた建築技術のなごりは、ひとりベトナムの胡朝城に留まらず、広く同時代の中国の北京や南京のような都城建設にまで及んでいたことは、きわめて重視すべき事象である。

またこのような胡朝城の堅固な城壁と、その周囲のかなり隔たった位置に廻らされた水堀を見る時、防御設備をこのように建設した理由のひとつに、以下に述べるような火薬兵器による攻撃を防ぐという意図が含まれていたのではないかと、とも推測される。

### 中国の建設工業大臣となったベトナム人黎澄の活躍

明の永楽帝は、胡朝の創始者である胡季犛(こきり)を、息子の胡漢蒼と共に捕らえて処刑している。しかし、同じく永楽5年(1407)に捕らえられた胡季犛の長男である黎澄(れいちよう:Lê Trùng:または胡元澄:Hồ Nguyên Trùng:1374~1446)だけは助命されていることが注目される。

これは、黎澄が火薬兵器の製造や取り扱い技術に優れていたからに他ならない。明の何喬遠(かきょうえん)の『名山蔵王享記(めいざんぞうおうきょうき)』と、同じく明の嚴從簡(げんじゅうかん)の『殊域周咨録(しゅいきしゅうしろく)』によれば「(黎)澄は神槍法を(永楽帝に)献上した。」とある。また『明実録』には「(黎)澄はもっぱら兵仗局において銃箭と火薬を造らされた。」と記されている。

黎澄が明に献上した火薬兵器は、永楽帝が明の北方を遠征した時に、モンゴル族の騎兵を攻撃するのに大きな効果があった。そのような功績によって黎澄は累進して現在の建設工業大臣に相当する工部尚書(こうぶしょうしょ)の極官にまで昇りつめ、その死後も明朝において「火器之神」つまり火薬兵器の神様としてあがめられたのである。

このような黎澄に対する明の厚遇は、彼の功績、ひいてはベトナムで開発され蓄積された火薬兵器技術が高く評価されたことを示している。

また明の李文鳳(りぶんぼう)が著した『越嶠書(えつきょうしょ)』は、ベトナム遠征を行った時に、明はベトナムの工匠などの人材の捕獲をめざしているが、その職種について「よく銃を使える者、よく銃薬を調合できる者は、彼らの家族が少人数であろうとも全て送ってくるように」という永楽帝の特別命令を伝えている。そして、『明実録』の弘治2年(1489)5月甲戌の条文には、永楽年間に連行されてきた安南人の子孫である阮清等に対して、彼らの祖先が「永楽年間に、よく火銃・短銃(たんそう)・神箭(しんせん)を製造したので」という理由で、朝廷が改めて顕彰したという記述が残っている。これらの史料から推測すると、黎澄以外にも、胡朝期ベトナムから連行された複数の火薬兵器技術者が存在していたようである。

### 中国で採用されたベトナムの火薬兵器

黎澄が明に伝えた火薬兵器というのは、神機鎗砲・神機火鎗・神機鎗あるいは略して神鎗と呼ばれるものであった。中国の年代記『明史』に収められた明の軍事白書にあたる「兵志(へいし)」に、

「成祖は交趾を平らげて、神機鎗砲の法を得たので、特に神機營を設置して（これを）習わせた。」

とあり、明の成祖永楽帝のベトナム胡朝征服によって、明は「神機鎗砲の法を得」て、「神機營」という組織を特に設けてそれを専修させたという記事が見える。明の文人である丘濬（きゅうしゅん）が著した『大学衍義補（だいがくえんぎほ）』巻122には、

「近ごろ神機火鎗というものがある。鉄で鏃（やじり）を作り、火（薬）を使ってこれを発射させると百歩（約150m）以上離れた（ところまで）届かせることが出来た。その（発射された鏃が）早いことは神秘的であり、銃声が出たかと思うと、もう火（のついた鏃）がたちまち届いている。

永楽年間、南方の交趾を征服したが、交趾の人が製造したものが最も巧妙であった。」

と明が胡朝期ベトナムから得た兵器についてやや詳しい記述が見える。これによれば、この兵器は、鉄製の矢のような形状の弾丸を、かなりの初速で発射できる火薬兵器であったようである。この兵器が銃のようであり、その弾丸は矢のようであったのは、前項で掲げた『明実録』に「（黎）澄はもっぱら兵仗局において銃箭と火薬を造らされた。」と「銃」および「箭」と記されていることでも明らかである。

明の茅元儀（ぼうげんぎ）の著した『武備志（ぶびし）』巻126に掲載された「神槍」の図には、筒形の銃身に矢の形をした弾体が収まっており、その鏃が少し突き出した形のものが描かれている。この「神槍」の図に対して茅元儀は「これが安南を征服した時に得たものである。」と注釈を施している。そして、『武備志』の「神槍」の形状は、先の『大学衍義補』に記された「神機火鎗」の特徴にも相似する。従って、『武備志』の「神槍」と、『大学衍義補』の「神機火鎗」の両者はほぼ同一のものと考えて差し支えなかろうと思う。

このような形状の火薬兵器は、永楽帝のベトナム遠征以前から中国にも存在していたが、14世紀のベトナムにおいても既にも実戦で使用されており、より優れた製法や使用方法を確立していたのであろう。ベトナムの年代記『大越史記全書』の光泰3年（1390）、正月23日の条に、陳朝の王族である陳葛真（ちんかつしん：Trần Khát Chân：1370～1399）が、北侵してきたチャンパ王の制蓬莪（チャー・ボーン・ガー：Ché Bông Nga：在位1360?～1390）が座上する軍船を迎撃する記事があり、それに、

「（陳）葛真が火銃を一斉に発射させたところ、（制）蓬莪に着（あ）たり、船板に貫かれて死んだ。」

という箇所がある。これによれば陳葛真の指揮のもと、「火銃」が一斉射撃され、

それはチャンパ王の制蓬莪に命中し、彼は「船板に貫かれて死んだ」という。

この記事に従えば、この「火銃」には目標を狙撃できるだけの精度があった。そして「船板に貫かれて死んだ」とあるから、チャンパ王は「火銃」の弾丸によって船板に串刺しになったと考えられる。この人を船板に串刺しにしたという着弾状況の描写から推測すれば、やはりこの兵器の弾丸は長い矢の形をしていたに違いない。そして、このような形状の弾丸は、飛距離と命中精度に優れていたと推測される。

### ベトナム人技術者による明の火薬兵器改良

① 発射ガス防漏措置：黎澄をはじめ胡朝期ベトナム人技術者の優れた点は、中国にもすでにあった同様の銃砲の単なる製造だけではなく、さまざまな技術改良を行っていたことである。その一つは、銃砲のガス防漏用器具「木送子（もくそうし）」を、弾丸と発射火薬の間に挟む工夫である。

この「木送子」について『武備志』の「神鎗」図には明瞭に描かれてはいるけれども、同書の著者である茅元儀の「神鎗」に対する注釈には「箭の下に木送子がある。」と書いている。「箭」とは先にも述べたように「矢」のことであるけれども、同じく明の曹飛が著した『陣図紀要』に、

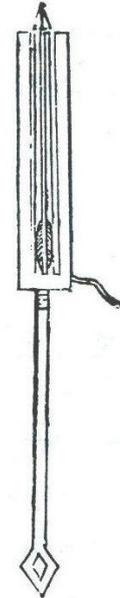
「安南を征服して得た神鎗の箭の下に木送子がある。同じように鉛の弾丸などを置くが、その（安南の神鎗の）優れた点は鉄力木を用いることであり、（鉄力木）は重くて力があるから、発射すると 300 歩（約 450 m）離れたところまで（箭が）届く。」

と記している。この記載から考えると「木送子」とは、「子」つまり弾丸を送り出す木製の物体である。恐らく矢のような形状の弾体を発射用火薬の上に直接置くと、矢と銃身（または砲身）との間に隙間ができるので、弾体を発射する火薬ガスがその隙間から多く逃げてしまう弊害があるのだろう。

それで、矢と発射火薬の間に木製の「栓」のようなものを挟んで置いて、弾体の矢に発射ガスの圧力が十分加わるように工夫が施されたものと思われる。

さらに、ベトナム製の「神鎗」に使われる発射火薬ガス防漏用器具「木送子」の優れた点として、これが「鉄力木」製である所だという。「鉄力木」とは学術名 *Mesua ferrea*、和名セイロンテツボクというオトギリソウ科の常緑高木のこと、非常に重くて硬い。

要するに『武備志』に描かれた 100 歩の飛距離がある「神鎗」に、「鉄力木」製の「木送子」を加えると飛距離は 3 倍 の 300 歩にも伸びるということになる。



『武備志』掲載の神鎗図

② **点火機構の改良**：二つ目の改良は、銃砲の点火機構の改良である。明において黎澄等がその製造に従事し始めた永楽7年（1409）以降の銃砲は、それ以前に比べて明らかな改良が加えられている。たとえば永楽13年（1415）に製造された「英字一万五千三十四号」という銘文のある銃には、それまでは単なる銃身上の小さな穴であった点火装置の火門に、長方形の火皿とそれを覆う開閉式の火蓋が加えられている。このような火皿や火蓋は、ベトナムの多雨多湿を避け、かつ火薬兵器の点火を確実にしてきた黎澄等ベトナム人工匠の経験による防雨防湿装置と考えられている。

なお14～15世紀ベトナム人の技術力がなぜ開花したのかは不明である。あるいは胡季犛の故郷ゲアン省クインリュウ県（huyện Quỳnh Lưu, tỉnh Nghệ An）には10世紀から中国人のコロニーが存在していたので、この地で継続的に接してきた中国文化が成熟し、独自の技術文化を形成したのかもしれない。

ともあれ、かつてベトナム人は、15世紀の東アジアの広域で普遍的な価値を持つ兵器を製造しただけでなく、その改良にも優れていたのはたしかである。

ただ、以上で注目するのは、本第3章で引用した中国史料に「交趾の工匠百三十余人、妻子をともなって京に到着した」とあり、また本第3章第2節第1項の引用史料でも「よく銃を使える者、よく銃薬を調合できる者は、彼らの家族が少人数であろうとも全て送ってくるように」と、ベトナム人の工匠たちは「妻子」「家族」と共に中国に送られていることである。

そして、これらの優秀な工匠が、家族ごとベトナムから連れ去られた後、ベトナムにおいて胡朝のような技術力があまり目立たなくなる。このことは、このような技術の継承が個々の家族内においてのみ行われ、社会でそのハードやソフトの共有が行われなかったことを示唆している。

しかしながら、必ずしもベトナム社会においてハードやソフトの共有が全く行われぬ、ということではない。同じような戦争状態でも、以下に示すように現代のベトナム人民軍において、当然のことながらその共有が行われている。

### ガイドラインミサイルの運用

前節では、15世紀にベトナム人が既存の兵器を改良に優れた能力を示したことを述べたが、現代において彼らは近代兵器の取り扱いにも巧妙であった。それは、ミサイルの改良ではなく運用において発揮されている。

ベトナム戦争の後半期、アメリカ合衆国は和平協定の促進を目指し、北ベトナムに交渉のテーブルに就くことを強要させようとした。その手段として、1972年12月18日より11日間、B52戦略爆撃機などを使用してハノイなどに対する大空襲“ラインバッカーⅡ作戦”を行い、約2万トンの爆弾を投下した。

対する北ベトナム防空軍は、旧ソ連から提供されたSA-2対空ミサイル（西側の呼称ではガイドライン）をもって対抗した。このミサイル自体はマッハ3.0で飛び、最大射程：25km、最大射高：18kmもある高性能であった。しかし、肝腎の誘導は電波によるものであったので、B52戦略爆撃機の電波妨害装置に阻まれて当初は全く命中しなかった。

そこで北ベトナム防空部隊は、ミサイル誘導用の電波発信を停止した上で、爆撃のためB-52が必ず旋回する空域めがけて、このSA-2対空ミサイルを大量

に発射したのである。このミサイルには、ミサイル本体から発信された電波が近くの目標に反射すると自動的に炸裂する近接信管が備えられていた。その為、B52の飛行高度に達し、その近くを通過することの出来たミサイルが次々に炸裂した。そのため、さしものB52も15機が撃墜されてしまった。

まさに、ベトナム人の運用面における優れた応用能力が発揮された一例というべきである。

### 第3章のまとめ：ベトナム人の個人の能力と家族主義

このように、正確な土木測量や精緻な土木建築、武器の改良や運用といった面で歴史上ベトナム人の才能が開花している。これらは数学的な才能に恵まれているということ想像させるものである。現代においても国際数学コンクールにおいてベトナム人はしばしば入賞している。近年では2010年に、気鋭のベトナム人数学者ゴー・バオ・チャオ（Ngô Bảo Châu）氏が、数学界におけるノーベル賞といわれるフィールズ賞を授けられている。

しかしながら、15世紀のベトナム人工匠が家族ごと中国に連れ去られてしまうと、それ以来ベトナム国内の土木技術や火薬兵器の改良には目立った発展が長期にわたって見られない。このことは、このような技術が、個々の家族内でのみ継承されてゆき、容易に他者には普及しないということを示している。

他の事例をあげれば、ベトナム伝統医薬関係の書籍を研究しているラム・ザーン（Lâm Giang）氏はベトナムの伝統医の優れた業績を紹介しながらも、その成果が著された医薬書が、家族内での「秘伝」となっていたため、貴重な書籍に蓄積されたソフトが次第に散逸あるいは埋没していったことを指摘している。このような家族内での技術継承はベトナム語でザーチュエン（gia truyền：家伝）と呼ばれるが、これはベトナム人の家族主義を象徴する言葉といえよう。

そして、対空ミサイルの巧みな運用を行ったベトナム人民軍という規律と社会的使命感を共有する近代組織の中において、家族主義のマイナス面は解かれるということも理解される。

このような家族主義は、「第1章のまとめ」においても述べたように、ベトナムの恵まれた風土においては他人に頼らずとも自活できる、ということに起因している。従って、その伝統は胡朝以前から連綿として続いているのである。たとえば胡朝が滅ぼした陳氏一族が興した陳朝も、皇族となった陳氏の家族や親族のみが政経・軍事における重要な全ての役職を独占するという家族主義によって王朝が成り立っていた。

ともあれ上記のように歴史上、確かにベトナム人は優れた能力を発揮している。そのような才能や技術力は家族の中で醸成され受け継がれていった。しかし、このような能力は、植民地支配や戦争が過酷さを増した状況にならないと、家族や親族を超えた社会においてなかなか発揮しないということにもなる。

換言すれば、家族主義に従うベトナム人の特徴として、他人を気にせず、客観的に自己評価できないことがある。反面、ベトナム人自身がある課題への対処能力がないと自覚し、危機感に迫られた「切羽詰った」時にはじめて他人との連帯を持つ傾向があるようだ。

## 第4章 科挙制度とベトナム人の形式主義

### ベトナムの科挙制度と儒教教育

物事を「形式が整えばよし」とするベトナム人の傾向について、ベトナムで約900年近く（1075～1919）も行われた科挙制度の内容が示唆に富んでいる。

前近代において、ベトナムは官吏登用試験制度として中国で行われていた科挙制度を採用した。ベトナムで科挙が最初に行われたのは、年代記の上では李朝（1009～1225）の仁宗皇帝（在位1072～1127）治下の太寧4年（1075）とされている。しかし、本稿の第3章で述べたように、ベトナムにおいては中国の科挙制度の思想的背景である儒教はなかなか普及しなかった。そのため、科挙制度の体裁が整うのも遅く、李朝の科挙試験開始から400年近く後の黎朝前期（1428～1533）に、第5代皇帝聖宗（在位1460～1497）の尽力により、ようやくその制度が確立した。

また、当初は儒教官僚養成用の国立大学である国士監（こくしかん）の大学生でさえ儒教經典のうち詩文集の詩経（しきょう）と古代の伝説的な歴史書の書経（しよきょう）のみ勉強し、他の經典にはなかなか興味を示さなかった。そこで聖宗皇帝は、科挙制度整備と共に儒教教育にも力を入れ、五経博士を設けて經典ごとの講義と出版を行った。このような努力の結果、この時代に多くの儒学官僚が輩出された。しかし、聖宗皇帝の治世の後半である洪徳年間（1470～1497）をピークとして、ベトナムにおける儒教研究とその教育はしだいに形式化していったのである。

### 「受験参考書」が多いベトナムの儒教書籍

ハノイ市の国立漢喃（ハンノム）研究院は、ベトナム最大の漢字文献とベトナム固有の国字である喃（ノーム）字（いわゆるチューノーム：chữ Nôm）文献コレクションを所蔵している。このコレクションの中には、18～19世紀にベトナムで刊行された一般に儒教經典とよばれる論語・大学・中庸・孟子の四書、および詩経・書経・礼記・易経・春秋の五経に関する書籍が、122部確認されている。

同研究院のゲン・ティ・ラーム博士の分析によれば、その内容に従って、これらは以下の4グループに分けられるという。（以下は、部数と全体に占めるパーセンテージおよび同様のグループに属するいくつかの書名をしめす）

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| ① 研究書と教科書：38部、24% | 『大学釈義』『中庸講説』など   |
| ② 科挙受験参考書：67部、42% | 『詩経冊略』『易経冊略』など   |
| ③ 内容要約書：29部、18%   | 『中庸撮要』『書経撮要』など   |
| ④ 喃字への翻訳書：26部、16% | 『大学講義』『易経正文演義』など |

上記のように、全体の半分近くが、②の科挙受験参考書であり、他も③、④のような儒教經典の要約か翻訳という一種の受験参考書であって、これらが全体の76%を占めている。

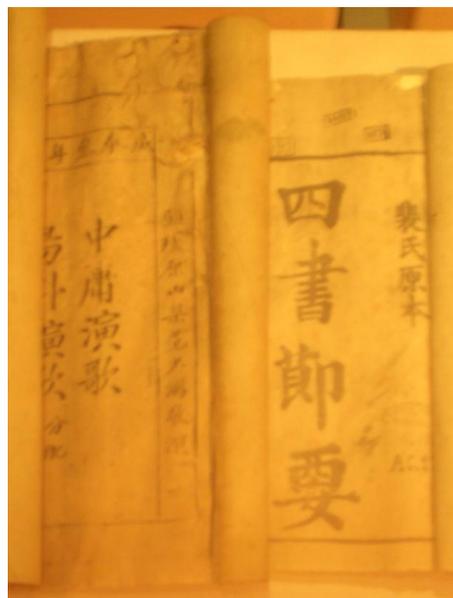
## 科挙受験対策偏重の風潮に対する明命帝の嘆き

漢喃研究院の儒教経典コレクションは、もちろん既存のテキストを全部網羅しているわけではない。従って、このように科挙受験参考書が占める割合が多い傾向は、往時のベトナム儒教界の全てを反映しているとは必ずしも言えないかもしれない。

しかしながら、上記儒教典籍の内容に見られるように、ベトナムの儒者たちが科挙受験対策に偏重していた傾向があったのは事実であった。ベトナム最後の王朝である阮朝（ゲンちょう：1802～1945）の第2代皇帝明命帝（ミンマンてい：在位 1820～1840）は、儒教思想にのっとりた中央集権国家の確立をめざしたため、黎朝の聖宗皇帝と並んでことのほか科挙制度や儒教教育の整備に熱心であった。この明命帝が、潘輝湜や黎文徳等の官僚と学問読書について

話し合った時、明命帝の問いに答えて、黎文徳は「私が学んだのは挙業（科挙受験対策）の文のみですので」と言い訳をした。それで、明命帝は「挙業の文が人を誤らせてきたのは、まことに久しきにわたることだ」と嘆いたという。

明命帝は更に述べて「わが国の挙業は、従来ただただ儒教経典を暗記するのみで、先生が教えるところも、弟子が学ぶところももっぱらこれに限られていて何の創意も生まれず、何の役にも立たない。」とベトナムの科挙について厳しく批判している。



ベトナムの科挙受験参考書『四書節要』と『中庸演歌』（ハノイ歴史博物館蔵）

## 第4章のまとめ：形式主義からくる「自信」

以上述べたような形式主義は、第6章で述べる根拠の無い自信にもつながるでもある。

しかし、日本人においても著名大学の卒業証書があれば、実力以上に評価されるし、証書を持っている本人も、そのように勘違いすることもある。ただ、たとえば日本企業の社長の多くは必ずしも著名大学出身者ではないことが証明しているように、日本は実力社会の面も強いので、形式主義が全てを覆ってはいないだけのことである。

## 第5章 ベトナム人と日本人との知識共有の歴史

### ベトナム人の日本人評価

これまで述べてきたように、ベトナム人は、日本人と異なった生活基盤と気質を持っている。それにもかかわらずベトナム人が日本人を積極的に評価してきた歴史が存在する。日本人は、その歴史的背景を心に留めてベトナム人と接し、また自らの行動の参考にする必要があるのではないだろうか。特に日本人とベトナム人とは和製漢字熟語という知識を共有し、交流に有利な基礎的条件が存在していることは重要である。本第5章においては、日越交流史におけるいくつかの事象を回顧しつつ、この両国人の知識共有について再認識したい。

### 17世紀ベトナムの將軍夫人ちよ

8世紀に唐王朝のベトナム地域を統治する総督である安南都護（あんなんとご）を勤めた阿部仲麻呂（あべのなかまる：698～770、安南都護在任761～767）のように、古代からベトナムにかかわった日本人はいる。しかし、彼は唐の朝廷で高い評価を受けて、ベトナムを統治したのだが、現地住民がどのように彼を見ていたかを示す史料が無いのでわからない。

ベトナム人が日本人をどう評価したのかが史料上に現れるのは、17世紀に日本人が朱印船（しゅいんせん：海外渡航許可証である朱印状を持つ船）に乗ってベトナム北・中部に渡来し、日本人町を建設して商業などに従事してからである。そして、20世紀に入ってから、和製漢字熟語を媒介にしてベトナム人と日本人の知識情報の共有という新たな展開が見られる。

日本人町はベトナム中部のホイアンが有名であるが、北部にもフォーヒエン（Phố Hiến: 舗憲）という日本人町があった。ここは現在のフンエン省（tỉnh Hưng Yên）に属し、紅河に面している。このフォーヒエンのさらに北に、今も陶磁器生産によって有名なバッチャーン村（xã Bát Tràng）がある。その住民のゲン家に伝わる先祖の事跡について記した『阮家家譜』がある。これに同家の先祖に日本人の女性がいたことが明記されている。

その女性はベトナム名で理氏瑤光（リー・ティ・ザオ・クアーン：Lý Thị Dao Quang）と呼ばれた。『阮家家譜』には彼女について「北国日本人、旧黎朝勅賜（ちやくし）理左衛門参督署衛義郡公の子、名は著於」と日本人であることを明記している。文中において彼女の父である義郡公の称号に「理左衛門」と記しているが、これはベトナムの官職名ではなくフォーヒエン日本人町の実力者であった和田理左衛門の名前に違いない。そして、その娘の名は「著於」と書かれているが、恐らく「ちよ：千代」の音写ではないかと思われる。

彼女は辛亥の年（1671年）7月25日に生まれ、庚辰の年（1700年）3月24日に30歳で亡くなっている。短い人生ではあったが、彼女はバッチャーン村出身の懷遠將軍総兵使司総兵事林寿侯の肩書きをもつ阮成章（ゲン・ティン・チュオン：Nguyễn Thành Chương）という將軍の「孺人（じゅじん）」つまり正夫人として迎えられ、2男3女にも恵まれている。これは、高位のベトナム人に正夫人としての待遇を受け、かつ夫に愛されていたことを示すものである。

父の理左衛門も義郡公という官爵を黎朝の皇帝から「勅賜」された貴族として処遇されている。

朱印船に乗ってベトナムに渡航した日本人の主な目的は、絹製品の買い付けであった。14～16世紀の室町時代と戦国時代の間、日本では耕地開拓や産業開発が進み経済が発展していた。そして、1590年に豊臣秀吉が小田原の北条氏を屈服させて天下を統一し、戦国時代は幕を閉じた。この平和と経済の余裕を背景にして、人々は豊かな生活を求め、衣服も絹製品を求めた。日本人に最も人気があったのは中国の絹製品であったが、倭寇（わこう；日本人海賊）を恐れる当時の中国の王朝の明（みん：1368～1644）は鎖国をしていた。そこで、中国商船は合法的に渡航できる東南アジア地域で、日本船に絹や生糸を販売したのだ。特にベトナム本国でも絹が生産されたので、日本人商人は盛んにベトナムへ渡航し、絹や生糸を購入した。このような背景の中で、フォーヒエン日本人町が発展し、和田理左衛門がその中心的存在となっていたのである。

しかし、1635年に日本の江戸幕府は鎖国政策を実行し、海外在住の日本人の帰国までも禁止した。従って1635年以降、和田理左衛門はベトナム側にとって直接利益を生み出さない存在となっていたはずである。それにもかかわらず、鎖国から36年もたってから生まれた和田理左衛門の娘が將軍の正夫人となり、彼も貴族として処遇されている。これらのことは、この17世紀ベトナム北部の日本人町で生きた日本人の父娘の言動が、交易の利益不利益を度外視してベトナム人から高く評価されていたと推察することができよう。

しかし、17世紀の和田理左衛門父娘のどのような生き様が、ベトナム人に評価されたかについて今は具体的に知るすべはない。ベトナム人が日本人の行動や思考を高く評価し、特に日本人のソフト面を体系的に摂取したことが明らかになるのは、以下述べるように20世紀に入ってからである。

### フランスの侵略とベトナム人のソフト改革：東遊運動と東京義塾

19世紀後半、アジア・アフリカの多くの地域が欧米人の植民地になった。そして、そのような地域で原住民が独立を回復するために近代兵器購入などのハード面に力を尽くしても殆ど労力と金銭の大きな浪費に終わった。

結局、多数の原住民自らが合理的な思考法や近代諸制度の効率の良い運用概念というソフトを身に付けることが必要であった。そして全てはソフトの入れ替えが不可欠ということ自体に気づくまで更に長い苦闘が続いた。

ベトナム人も長い闘争（1858～1954）を経てフランス植民地支配から独立を勝ち取った。

フランスは中国に販路を求め、その進出ルートの延長上にあるベトナムを植民地にしようとした。そして、1883年、北・中部もフランスの「保護下」に置き、ベトナム全土の植民地化完成した。1897年2月～1903年3月の間に在任した植民地総督ポール・ドゥーメール（Paul Doumer：1857～1932）は、植民地財政をフランス本国依存からの脱却を目指し、財源確保のために人頭税・生死税（ベトナム人が出生・死亡する度に課税）・庭税（庭の有無とその面積に課税）・宴会税（全ての宴会が開かれる度に課税）などのおびただしい税をベトナム人

に課した。さらに塩・アヘン・酒などベトナム人の必需品を専売にしたので、その結果物価は5倍以上に高騰した。また米を供出させ飢餓輸出を強行したのでベトナム人は塗炭の苦しみを受けた。

この過酷なフランス植民地政権に対して、しばしばベトナム人は武力による抵抗を試みたが、抵抗勢力の兵器の運用や近代戦術への未熟のためことごとく失敗した。そこで東遊運動（フォンチャオドンズー：phong trào Đông du：1905～1909）、東京義塾運動（ドンキンギアトゥック：Đông Kinh Nghĩa thực：1907）というベトナム人自身のソフト改革が行なわれた。

### 東遊運動の概要

最初の東遊運動は、ベトナムの青少年が日本で近代的ソフトの習得に努めた留学活動で、1905年（明治38年）～1909年（明治42年）に実行された。東遊運動の「東遊」とは「東方（日本）へ遊学（留学）する運動」の意味である。ベトナムから見て日本は東方にあるという意識からこのように呼ばれた。東遊運動は、民族主義者である儒者ファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu：潘佩珠：1867～1940）が提唱し指導した。

はじめファン・ボイ・チャウはフランス植民地体制を武力によって打破しベトナムの独立回復を目指した。しかし、ベトナム人自身では、まだまだフランス人には武力で対抗できなかった。そこでチャウは、フランス人と同じ白人の軍事大国であるロシアと日露戦争（1904年2月～1905年9月）において健闘するアジアの日本に着目した。1905年（明治38年）4月、彼は日本を訪れて、改進黨総裁・大隈重信（1838～1922）、衆議院議員・犬養毅（1855～1932）等に面談して軍事援助を求めようとしたのである。

しかし、ファン・ボイ・チャウが来日した時、彼の期待に反し、すでに日本は戦争を続けることが出来なくなっていた。たとえば強大なロシア陸軍と激闘を重ねた日本陸軍将校の死傷者はおびただしかった。チャウが来日する1ヶ月前の1905年3月に行われた奉天会戦の後には現役将校どころか予備役将校さえ底をついた。つまり陸上で直接戦闘の指揮をする者が殆どいなくなっていたのである。さらに日本は戦費の実に82.4%を内外の公債と借入金に頼るしかなかった。しかし日本には鉱山などの担保が少なく大規模な公債に依る欧米諸国を探することは困難を極めた。

### 東遊運動留学生の来日

日露戦争に苦戦中であったこと、そして国際慣行上からも日本はファン・ボイ・チャウの求める軍事援助に応じることができなかった。そのかわりに日本の指導者たちは、チャウにベトナム人青少年を日本に留学させることを提案した。つまりベトナム人のソフトの入れ替えをまず勧めたわけである。これが東遊運動の発端であった。

1906年（明治39年）1月、陸軍参謀次長兼振武（しんぶ）学校校長の福島安正大将（1852～1919）等の周旋で最初のベトナム人留学生4名が軍人を志す清国人留学生の予備校である東京の振武学校（1903～1914）に入学した。1907年（明治40年）8月には犬養代議士、福島大将等が私費を投じて清国人韓国人留

学生への基礎教育施設である東京同文書院（1899～1922）に5教室を増築しベトナム全土から集まった200余名の留学生を入学させた。彼らの内訳はおおよそ南部人が最多の100名、中部50名、北部40名であった。その後も留学生は続々と来日し1908年（明治41年）には約300名に達したと推定されている。このように青少年が外国へ留学したのはベトナム史上初めだとチャウは自著『獄中記』に感慨深く記している。

### 東遊運動の終焉と日本人の支援

一方、フランスは東遊運動が植民地支配にもたらす重大な影響を機敏に悟った。そして留学生の家族を投獄して脅迫し子弟の帰国を促す手紙を書かせたのである。さらに負債に苦しむ日本政府に対して1904年度の日本政府準備正貨額1億1600万円余に相当する3億フランもの巨額の公債発行を認めるかわりに留学生の引渡しを求めた。犬養や福島等の政府と軍部の要人は、いったん留学生を帰国させてから東遊運動の再開を目指して内外の調整を行うのに約1年の猶予をチャウに求めた。しかし事態に失望した彼は応じなかった。

それでも日本政府は留学生の解散を命じただけでフランス植民地政府に彼らを引き渡したりチャウを逮捕したりはしなかった。またチャウが書いた自伝『自判』によれば、帰国をあせる南部からの留学生への対応に苦慮する彼に、犬養毅は日本郵船の旅券100枚と現金2000円を提供している。民間においても静岡県袋井市（旧浅羽町）の医師・浅羽佐喜太郎（1867～1910）は東浅羽小学校校長の給料が18円であった当時、1700円もの大金を困窮するチャウに贈ったのである。

東遊運動には、こうした日本官民からの物質的・精神的援助をチャウや留学生が受けた感動的なエピソードがちりばめられる。しかしまた冷めた目で東遊運動を見れば、結局自国の独立は他国に頼らず自国民が獲得しなければならない苦い教訓をチャウ等に与えた。また日本の政界や軍部が同じアジア人への同情だけで東遊運動を支援したとは思えない。なぜなら彼らは長年ロシアに投資してきたフランスがロシアと組んで第2次日露戦争を起こすことを非常に恐れていた。特に情報戦が専門の参謀次長・福島大将がなぜ一貫して留学生の軍事訓練を支援したかに注意すべきだろう。彼は、いざという時に近代戦の訓練を受けた元留学生たちが蜂起し、日本を攻撃しようとするフランス軍がインドシナで釘付けになることを期待したのではなかったか。

### 留学生が受けた授業・訓練とその成果

東遊運動に言及する時、日本人の支援や思惑、チャウ等が得た苦い教訓などに比べて留学生が日本で3年間も懸命に学んだ事実は希薄になりがちである。そして最も重要なことは東遊運動の大きな目的である近代の諸知識や思考法をベトナム人留学生自身がどのように祖国に還元したかである。

東京同文書院での授業は、午前中は日本語、算術、地理、歴史、化学、物理などの学科を学んだ。午後は軍事訓練を行った。

この間、ベトナム人留学生は日本語とりわけ和製漢字熟語を通じて近代的な学識を習得していったのである。振武学校でも同様であり、日本語、歴史、地

理、化学、生理衛生などを学んだ。同校で留学生が学んだ教科書『日本文言課本』（明治37年（1904）発行）には「海軍」「陸軍」「精神教育」といった日本で造語された言葉が多く見られる。これら留学生が習得した和製漢字熟語を通じてベトナム人が近代的知識や技術を学んだことは確実で、現代ベトナム語にも hải quân（ハイクアン：海軍）、lục quân（ルックアン：陸軍）、tinh thần（テインタン：精神）、giáo dục（ザオズック：教育）などの和製漢字熟語起源の漢越語（ベトナム語で発音される漢語）が存在する。これこそ東遊運動の大きな成果であった。

### 東京義塾 -和製漢字熟語の普及-

東京義塾はベトナムの民族主義者ファン・チュー・チン（Phan Chu Trinh : 潘周禎: 1872~1926）等が創立した。同様の活動である東遊運動（Phong trào Đông Du : 1905~1909）を指導したファン・ポイ・チャウは留学生を日本に送り海外でベトナム人のソフト改革を行ったが、東京義塾は国内でソフト改革を実行したのである。

はじめチンは科挙試験に合格し阮朝（1802~1945）の官僚になった。やがて彼は植民地支配に甘んじる阮朝朝廷に失望し、1906年（明治39年）に日本へ渡航した。そこで停滞するアジアにおいて日本のみが躍進する理由は近代教育の普及であり、ベトナム国内にも同様の教育が不可欠であることを痛感する。

### 東京義塾の創立とその授業

帰国したチンは同志と共に1907年3月、現在のハノイ市旧市街のハンダオ通り4番地に東京義塾という学校を創立した。在日中にチンが慶応義塾に感銘してこのような校名にしたと言われる。

東京義塾は内外の支援者からの寄付で運営され、学費無料で文房具まで支給された。学生は児童から成人までの男女が昼間部と夜間部に別れて就学した。授業内容は倫理道徳、自然科学、政治経済、日本を含む諸外国の諸制度などが、漢文・フランス語・ベトナム語で教えられた。しかも授業は教師の講義を一方的に学生が受けるのではなく、さまざまな課題をめぐる教師学生間の活発な質疑応答と討論が行なわれた。最初70人ほどであった学生も1907年7月には1000人以上が40もの教室で学んだので、その急増に対処してハンダオ通り10番地に校舎を増設したほどである。

### 東京義塾の終焉とその影響

事の重大性を察知したフランス植民地政府は1907年12月にチン等を逮捕し東京義塾を廃校にしたので、同校は9ヶ月ほどしか続かなかった。しかし、この教育活動の影響は巨大であり、東京義塾以外にも同様の教育目的や授業内容を実践した数多くの学校がベトナム各地に創設された。ハノイ市では梅林義塾（Mai Lâm Nghĩa thực）や玉川義塾（Ngọc Xuyên Nghĩa thực）などが有名であり、ベトナム中・南部にも同様の学校が林立した。特に南部の同文学館（Đông Văn học quán）と総称される諸学校の学生数は数万人に達した。また東京義塾で使用された教科書も繰り返し発行され全土に普及している。

## 東京義塾における和製漢字熟語の学習

東京義塾の学生は日本で造語されたり、新しい意味を与えられた漢字熟語を通じて先進知識を学ぶことが多かった。というのは同塾で使用された教科書には和製漢字熟語が多く含まれていたからである。

たとえば東京義塾の教科書の1冊『新訂倫理教科書』の書名にある「倫理」、同書目次に見える「衛生」や「社会」は以下のように日本人が造語したり、元の熟語に新たな意味を加えたものばかりである。

【倫理】島根出身の思想家・西周（にしあまね：1829～1897）が明治8年（1875）に英語の Ethic から造語した。この他にも西は多くの用語を造語したり、既存の漢字熟語に西欧語の意味を新しく加えている（別表参照）。

【衛生】明治の官僚である長与専斎（ながよぜんさい：1838～1902）が中国古代の哲学書『莊子』庚桑楚篇の用語にドイツ語 Hygiene（ヒュキーン）の意味を当てたと言う説と、明治7年（1874）に京都の蘭学者・明石博高（あかしひろたか：1839～1910）がオランダ語の gezondheidssleer（ゲゾントヘイドレール）から「衛生」という言葉を造語し長与に教えたという説がある。ともあれ長与はこの言葉を広め、内務省衛生局初代局長になっている。

【社会】江戸時代の文政9年（1826）に伊予松山藩（愛媛県）の蘭学者・青地林宗（あおちりんそう：1775～1833）がドイツ人ヨハン・ヒューブナー（Johann Hübner：1668～1731）の地理書を翻訳した『輿地誌略』において教団・会派の意味で「社会」という言葉を造語した。その後、明治7～8年（1874～1875）に初代文部大臣森有礼（もりありのり：1847～1889）やジャーナリスト福地源一郎（ふくちげんいちろう：1841～1906）が現在の意味で「社会」の語句を著述に使用している。

## ベトナム語と和製漢字熟語

以上のような東京義塾が普及させた和製漢字熟語はベトナム語に数多く取り込まれた。たとえば先に紹介した同校の教科書『新訂倫理教科書』で教えられた「倫理」はベトナム語で luân lí（ルアンリー）、「衛生」は vệ sinh（ヴェシン）、「社会」は xã hội（サーホイ）と表現され現在も用いられているのである。

これは督学（Đốc học：ドックホック）・訓導（Huấn đạo：ホアンダオ）といった阮朝の地方教育官僚が



ハノイ市の東京義塾広場：画面右側の建物の間にあるハンダオ通りに東京義塾があった。

数多く東京義塾に協力し、これらの漢字をベトナム語のアルファベット表記文字であるクオックグー（Quốc ngữ：国語）に訳した結果でもある。

西周の新造語と現代ベトナム語対照表

原 語	西周の新造語	造語時期	現代ベトナム語
Philosophy	哲 学	慶応（1865～67）末年	triết học（チエットホック）
Aesthetic	美 学	明治5年（1872）	mi học（ミーホック）
Ethic	倫理学	明治8年（1875）	luân lí học（ルアンリーホック）
Psychology	心理学	明治8年（1875）	tâm lí học（タムリーホック）
Logic	論理学	明治8年（1875）	luận lí học（ルアンリーホック）
Phenomenon	現 象	明治11年（1878）	hiện tượng（ヒエントウオン）
Subject	主 観	明治11年（1878）	chủ quan（チュウクァーン）
Object	客 観	明治11年（1878）	khách quan（カククァーン）

鈴木 登「西周哲学の認知体系と統一科学 - 統合化への構図を求めて -」（『西周と日本の近代』ペリカン社、2005年、pp.282-323）、Hoàng Phê（chủ biên），*Từ điển tiếng Việt*, (in lần thứ ba), Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, 1994. などより作表

### 活用すべき貴重な遺産

東京義塾や東遊運動の努力の結果、現代ベトナム語の中に和製漢字熟語が多く含まれている。しかし戦争などで長らくベトナム人が漢字教育を受けていないため、今では漢字は日本語を学ぶベトナム人の大きな障害になっている。ただ、和製漢字熟語の再習得に際し本来ベトナム人はハンディが少ないわけである。人間は意味のある言葉だけ記憶し正確に使用できる。従ってベトナム人は和製漢字熟語と意味の似通ったベトナム語を使っているのだから、これを日本語教育は活用すべきだ。たとえば教師がベトナム語で発音し学生が反射的にその漢字熟語を書けるように練習すれば漢字習得は容易だと思われる。

また反対に、上記の理由から多くのベトナム語のキーワードが日本語と良く似た意味を持ち、発音も日本語に近いものがあるので、我々日本人がベトナム語の文章を読んだり、歴史・文化・経済などの話をするのが実は比較的容易であることを心得ておくべきだろう。

### ベトミン軍に参加した残留日本兵への評価

東遊運動と東京義塾運動の後、ベトナム人の体系的なソフトの入れ替えに貢献し、現在再評価され始めているのは、太平洋戦争終結後もベトナムに残ってベトミン軍（Việt Minh：ベトナム独立同盟の略称）に協力した旧日本兵である。

1946年、インドシナ半島に復帰したフランス軍と戦っていたベトミン軍は、近代戦に適応した中・上級幹部軍人を持たないという大きな問題があった。これに対して約5000名といわれる残留日本兵が、幹部養成や軍事教練などを通じてベトミン軍に参加協力している。

1986年以来、これらの旧日本兵はベトナム人民軍から叙勲され、その功績を評価され始めている。中でもベトナム北部においては、後のベトナム人民軍の母体ともなったベトミン軍の作戦立案に協力した駒屋俊夫氏（1923～）が象徴

的である。

福井県出身の駒屋俊夫氏は、1942年に日本政府によってサイゴン市に設立された南洋学院に入学した。南洋学院は、インドシナ半島における日本人の拓殖事業要員の養成を目的とした外地教育機関である。南洋学院第1期生として、フランス語・ベトナム語ならびに農業経済を学習中、1944年に召集を受け日本陸軍第21師団第51山砲連隊に配属された。翌1945年に現地除隊した駒屋氏は、ベトナム語名グエン・クアン・トゥック（Nguyễn Quang Thúc）を名乗り、1947年2月からバクザン省のベトミン軍民兵部隊本部で軍事地図作成に従事し、1950年からはベトバク連区参謀部作戦班において作戦立案と作戦参謀の養成を行い多大な成果を収めた。ベトミン軍兵士の推薦を受けて大尉となった駒屋氏は、各地を転戦中にフランス軍機の機銃掃射により被弾し腹部貫通銃創の重傷を受けたりもしたが、1954年に日本へ帰国した。

このような駒屋氏に対する評価は、ベトナム人民軍の月刊誌『事件と証人』1999年10月号に「我が軍中の国際戦士《新ベトナム戦士駒屋俊夫ーグエン・クアン・トゥック》」という論題で寄稿したドー・ヴァン・トアン氏が、

「最も尊いことは、駒屋氏が幹部養成、作戦立案の経験を普及させ、（ベトナム軍が）現在から将来にわたって効果のある戦闘方法を打ち立てることに貢献したことである。」

と述べていることに象徴されている。ここでドー・ヴァン・トアン氏は、駒屋俊夫氏がベトミン軍の基幹要員の養成と作戦立案の訓練という、いかなる軍事組織形成にも不可欠な課題の実現について援助したことを高く評価している。そして、駒屋氏の援助は、当時のベトミン軍に対してだけではなく、その「将来」における戦闘方法の確立までに及んでいた。これは、駒屋氏の努力は後代のベトナム人民軍の戦闘方法にまで影響を及ぼしていたことを示している。

## 第5章のまとめ：和製漢字熟語の媒介

ベトナム人は、明治維新を行った日本の近代化の成果や日本兵の技能を採用するなど、ここ100年あまり、日本人の技能を評価し、その成果を採用してきたのである。

反面、この100年において、日本人はベトナム人に必ずしも常に好意的に接していたわけではない。1909年、日本政府は、フランスからの3億フランの外債と引き換えに、日本を頼りにしたベトナム人留学生の東遊運動を中断させた。第二次大戦末期の1945年には、フランス領インドシナに駐留する日本軍は、連合軍の攻撃に備えて大量の食糧を蓄えるためにベトナム人の保護を顧みることが少なかった。そのため北部ベトナムにおいて大量の餓死者を出す惨状が各地で見られたのである。またベトナム戦争中、1964～1972年の間において日本はアメリカ軍の重要なベトナム攻撃用の補給と出撃基地となった。これらのことについて、今も深く恨むベトナム人も存在することを忘れてはならない。

しかしながら、そのような歴史を経過した上においてもなお、過去の事象は

全否定されず、100年間の日越交流によって培われてきた日本人の知識やノウハウは依然として重要な役割や価値を持っている。

さらに、この歴史の経緯から引き出すべき重要なことがある。それは、先にも述べたように日本人とベトナム人は「和製漢字熟語」という共通の言語情報が存在することである。つまり、両国民が政治・経済・文化など多くがキーワードとなる言葉を深く共有する事実である。そのため、日本人がベトナム語を、ベトナム人が日本語を習得する場合、この点においてはハンディが少ないのであるから、大いに両国民は相手の言葉に関心を持ち、習得しあうべきなのである。

## 第6章 歴史と文化を踏まえたベトナム人との接し方

### ベトナムの歴史と文化に関心を持つこと

本第6章では以上のような歴史や文化を背後に持つベトナム人ワーカーやスタッフの特性に対してどう対処するかをQ. A. スタイルで考えたい。

**Q. 社員に過去の経験・事例を踏まえて将来の作業計画を立てるように指示しているが、その効果はあるのか？**

**A. 基本的に過去、未来のことを言っても仕方がない。彼らは現実主義者であるから要するに抽象論を大勢に言っても効果は無い。社員に対しては、直近の作業内容を具体的かつ簡潔に伝えることこそ重要である。**

**Q. テト休暇のあと、ワーカーが帰ってこないのはどうしてか？**

**A. 従業員への処遇、特に給与面について常に従業員側に立って考慮していたか省みることが必要である。**

ベトナム人従業員は、「家族」という氷山の一角にすぎない。つまり、1人の日系企業従業員の背後には、何百人、時として何千人もの「親類縁者」が、その従業員の給与を当てにしていることを心に留めておかなければならない。

ベトナムに” *Nhập gia tuy tục* (ニヤップザー・トゥィートゥック)” ということわざがある。これは「郷に入れば郷に従え」という日本のことわざを当てて訳される。しかし、このベトナムのことわざを漢字で表現すると「入家随俗」、直訳すれば「家に入れば、(その家の)しきたりに従う」という意味になる。

つまり、日本において、しきたりに従う対象は「郷」という「社会」である。それに対してベトナムでは、より小さな「家」が対象となっている。ベトナムと日本の概念の大きな違いを、このことわざが明確に示している。

そして、日本人が常に意識してはばかる「世間」という概念が希薄である一方、家族こそがあたかも一つの完結した宇宙であるという強い情念がある。そこは、金融機関、医療機関、教育機関、福祉機関という役割も果たすので、家族構成員は「我が家族」のみを頼りにし、信頼するのである。

その重要な「家族」を守るためには、その構成員はあらゆる犠牲をいとわないうものだ。このような「家族主義者」のベトナム人ワーカーへの対応で留意すべきことは以下のようなものがある。

① **ワーカーとその家族への関心を示すこと。**ワーカーと挨拶を交わす時、もしワーカーの家族のことを知っていれば「お母さんは、元気？」など、必ずその親族にも関心を示すべきである。地位の高い日本人のこのような声かけはワーカーとの信頼を築く上で効果が特に大きい。

② **1人のワーカーの背後にひかえる「龐大(ぼうだい)な家族構成員」のことを、少しでも考慮して所得を決めること。**ただ実際は、こういう考えを給与に反映させることが困難な場合が多いので、冠婚葬祭やテトのお年玉など(いわゆるモチ代)などで補填する工夫が必要である。

③ 叱るときは一対で行い、同時に次の対処を指示し、褒める時は人前で  
行うこと。これは、繰り返すまでもない人間管理の基礎であるが、第 1 章で述  
べたように、基本的に 1 人で生きいけるベトナム人は自尊心が強いので特に留  
意すべきである。叱るときは、単なる感情の爆発のみではなく、次に何をどう  
すべきか具体的な対処方法を同時に示さなければ、問題が際限なく繰り返され  
る可能性が高くなる。

④ 社員旅行・レクリエーションの実施。これらはワーカーとの親密性を高め  
る絶好のチャンスである。ワーカーは親族に仕送りをしていることが多く、ワ  
ーカー自身が自由に出来る所得は少ない。そのため、生まれ故郷の近くにある  
リゾート地にすら行ったことの無い人が少なくないので、社員旅行はワーカー  
に喜ばれる。

Q. 普通のワーカーではなく、よく信頼していた事務系スタッフまで、簡単に他  
の企業へ移ってしまうが、どうすればよいのか？

A. そのスタッフ本人だけに手厚く配慮しても駄目。家族にも関心をもつこと。  
基本的な対応はワーカーの場合と重なるが、以下のようなことが考えられる。

① スタッフと擬似家族になること。前の質問と同様の問題、家族主義への対  
応が必要になる。日系企業の事務所やその周辺で、「目をかけているスタッフ  
本人とだけ」親しくしては、その忠誠心を十分涵養するにはまだまだ不  
十分なのである。

なかなか実行や実現は難しいことではあるけれども、日本人スタッフまた  
はそれに准ずる人物が、テトや法事など折に触れてお土産をもって家を訪問  
し、従業員が最も大切にしているその父母や祖父母等と親戚づきあいをしな  
ければいけない。つまり、少なくとも自分も従業員の「擬似家族」になる心  
構えを常に持ち、それを表現する工夫を凝らすことが重要である。具体的  
にはスタッフの家族の法事や冠婚葬祭への参加や理解が必要となる

ベトナム人どうしても、血縁地縁が薄いか擬似家族以外の者ならば、互い  
に火星人か金星人のようなものである。従って、たとえば日本人の男性社長  
が、ベトナム人からセップ：sép（管理者、支配人）とは呼ばれてはいても、  
ポー（bó：お父さん）と呼ばれていないとする。このような場合、その日本  
人の社長は、ベトナム人スタッフにとっては太陽系の住民どころかアンドロ  
メダ星人のようにしか見られておらず、結局どう扱われてもしかたがないこ  
とが少なくないことを、わきまえておかなければならないだろう。

このような「家族の仲間入り」をするのには、片言でも良いからベトナム  
語を使うことが必要である。まずベトナム人は、ベトナム語を話す相手を「対  
等の人間」とみなすからだ。そのベトナム語で最も重要な言葉は、先ほど述  
べた「お父さん：ポー：bó」「お母さん：メ：mẹ」と「子供：コーン：con」  
などの親族に係わる人称代名詞である。オーナーは「お父さん：ポー：bó」「お  
母さん：メ：mẹ」は、従業員は「子供：コーン：con」と自称したり、呼ばれ  
たりする。そして、このような人称代名詞を言いあうだけでも立派な、しか  
もとても親しい挨拶になる。

② 家族に自慢できる仕事をしていると自覚できるようにすること。つまり家

族主義から派生したスタッフの自尊心を守ること。

③ 従業員にその仕事に達成感を持ってもらえるようにする工夫をこらすこと。

Q. 「法事」があるので休ませてほしい、という要望にはどう対処すべきなのか？

A. 家族主義につながるベトナム人の祖先信仰を理解する。

そういうワーカーやスタッフから甘く見られまいと、彼らが嘘をついているという前提で、常に「うたがいのまなこ」で対応することもできる。しかし反対に、欧米外資系に勤める日本人スタッフが盆休みを請求するとして「それは迷信だからだめだ！」と言われるのと同じように筆者は感じる。

それとも、「これで御供えでも」とポケットマネーでも出すとして、ベトナム人従業員の信頼感や忠誠心は、どちらの場合において育てられるのだろうか。

ただし、ワーカーやスタッフが大人数の場合、誰には出して、誰に出さなかったなどと不公平になりやすい。従って、あらかじめ慶弔費として計上する内規を作っておき、それに従って公平に処理すべきである。

Q. 情報収集を頼むと、オリジナルの情報（第一次資料）ではなく、又聞きのような第3次資料しか収集してこないが、どうすればよいか？

A. 作業内容を単純化し、どうしてももらいたいことやよく説明すること

情報の正確性や質よりも、ともかく「関連」資料を取りやすいところから収集すればよいという形式主義であるから、仕事上の創意工夫がむずかしい。「仕事を探してもやる」という日本人のようにはいかないのである。厳しい自然環境によって練磨された日本人の常識は、必ずしも世界の常識ではない。

たとえば、スタッフがオフィスを掃除するのは日本の常識のようである。しかし、学校でも掃除をするのは生徒・学生ではなく、学校が雇った掃除人が行うという環境で育ってきたベトナム人は、オフィスの掃除もしろといわれると困惑してしまう。

従って、自ら悟らせるというような難しいことを言うのはだめなので、まず作業内容をできるだけ単純化することが肝要である。つまり、日本人自身ならどういう行動するかを想定して、同様のことを、どのようにすればよいのかまで具体的に伝えるべきである。さらに言えば、「よく分かっていると思うけど」と相手のプライドを尊重しつつ、メモを取らせながら作業手順を詳しく説明しなければならない。

というのは、日本人は往々にして、ベトナム人スタッフやワーカーに対して説明不足になりがちだからである。その原因は①日本人スタッフが多忙にかまける、②「そんなことぐらい誰でも出来るだろう」というベトナム人への甘え、③ベトナム語など相手が十分に理解できる言葉を使えない、という3点に集約される場合が多い。日本人は自らの「常識」をかえりみつつ、ベトナム人の入社時から、してもらいたいことを、あらかじめよく伝えておかなければならない。

そして、ベトナム人に時として見られる「根拠のない自信」にも対処しなければならない。つまり「できます」「わかりました」という言葉を軽々に鵜呑みにしないことである。もし「できる」といった場合、そのできる根拠を確認す

ることが肝要だ。

こういう詳しい解説や、念入りな確認作業は、最初は大変なことではあるが、次回からは、少しずつ格段に労力が軽減されていくので踏ん張らなくてはならない。

Q. ベトナム人従業員に、あるノウハウを他のベトナム人従業員に伝えるために情報共有を心がけるように言ったが、なかなか伝わらない。どうすればよいのか？

A. ①口伝えにせず、メモを取らせて、後日さらに確認する。

②ベトナム人教育係りには、努力に比例した優遇措置をあたえる。

③教育をベトナム人まかせっきりにしない。ベトナム人教育係りのプライドに配慮しつつ、日本人がチェック。

「伝言した」「報告した」という形式的事実があれば、それで、その任務は完結したのである。つまり、内容主義ではないので、報告、伝言が精密に事実を反映しているのか、伝わっているか日本人が確認する心構えが常に必要がある。

具体的な対処法としては、基本的なことではあるが伝言や報告を求める時に、メモをとらせる、あるいは復唱させることである。

④他人には教えない文化に対処する。

第5章で述べたように、ベトナム人は家族主義第一なので、自分の知りえた情報や知識を、容易に家族以外の人に教えない傾向がある。

そこで、日本人は、このことを留意しつつ、次にベトナム人の中に日本人のソフトのコピーをつくり、そのベトナム人に情報共有作業をまかせるシステムを作り上げることが理想的だ。

## 第6章のむすび：

ベトナム人の特性を踏まえた彼らへの対処方法を考えてきた。しかしながら、ベトナムにも、

ノイティーゼ～、ラームティーコー：Nói thì dễ, làm thì khó

「言うは易く、行なうは難し」と言う諺があるように、それが現実である。恵まれた環境に囲まれていると、「臨機応変」、容易に物事に応じることの無い性格も維持されるようだ。その場では、一見理解したり納得したように見えても、たちまち旧状に戻りやすい。これは「形状記憶合金」にたとえられる。

形状記憶合金なので、一度日本人のソフトの力で形が変わっても、手を離すと元どおりになってしまう。従って、ベトナム人に日本人の持つソフトやノウハウが定着し、彼らが活用できるまで辛抱強く説明することが大切である。

そしてまた、積極的に歴史・文化そして言葉に関心を持ってベトナム人と接することは、一見迂遠なように見えて結局、効率が良くなると思われる。少なくとも、ベトナム人を客観的に理解するという心構えは、種々のストレスを軽減する重要な方法である。

## むすび：ベトナム人の対日観から見えてくるもの

### 依頼しあう日本人とベトナム人

ベトナム人の特徴を歴史・文化面から、現実主義、家族主義、形式主義、日本人との交流の歴史を通じて考えてきた。

本書の第5章において述べたように、日本人はベトナム人が危機感に迫られた（切羽詰った）時に、「ソフト入れ替え」を直接的または間接的に手伝った経歴が4度ある。東遊運動、東京義塾、残留日本兵による訓練、そして現在のドイモイ政策にともなう日本の援助（ODA）の受け入れである。このような経緯からベトナム人の日本人観は良好なものである。

また中国人、韓国人、ベトナム人と比べても、日本人が露骨に差別意識を表現することが少ないことも良い評価を受けている。そして、日本人が生産した家電製品、車やバイクに対し信頼性があることも、それらの製品を通じて日本人の性質や能力をベトナム人に考えさせる手がかりとなっているだろう。従って、「良いものは良い」と率直なベトナム人に評価されていると言える。

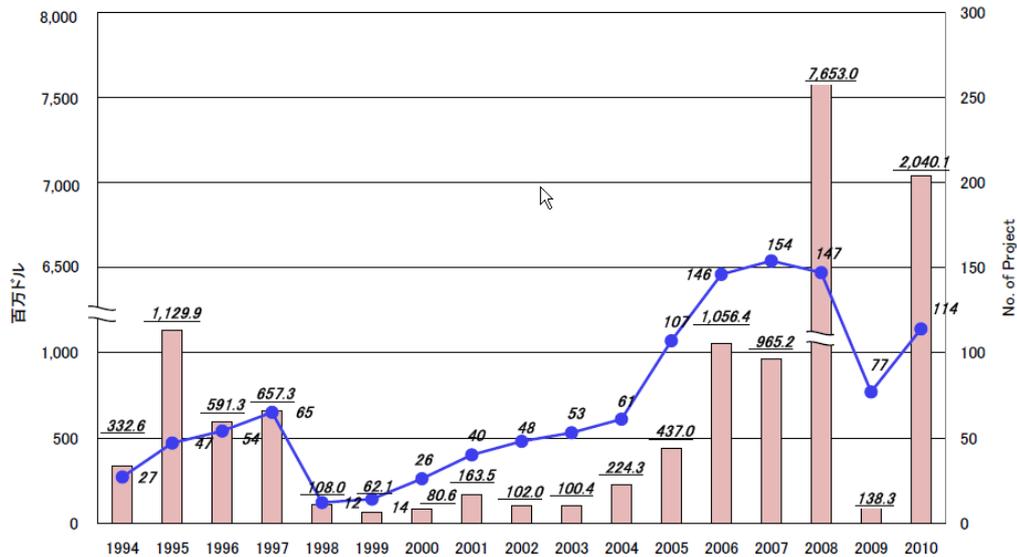
反面、ベトナム人は、日本は優れた先進国＝日本人は金持ち、という概念があるので、特に金銭面では何でも日本の負担にしようとするのが少なくない。たとえば、日越合弁組織において契約書では、ベトナム人スタッフの給料をベトナム側が支払うと明記していても、実際は色々理由をつけて日本側の負担にしようとする。日本側が難色を示すと、ベトナム人スタッフが出勤してこない事例があった。同様なことが少なからず起きたので、日本側代表は「これでは、まるでおんぶに、抱っこに、肩車をしているようなものだ」と嘆いた。

一方、ベトナムに進出しようとする日系企業にも全面的にベトナム人に頼ってしまいがちになることがある。例えば日本では相手（市場調査など）をよく調べるのにもかかわらず、筆者が序文で述べたようにベトナムでは行わないことが多いということだ。これは、マスコミの悪影響なのか、万能のベトナム人像が一人歩きしているために、容易に実情理解を放棄しがちである。ベトナム人は依頼心が強いということを書いてきたが、実は日本人も多々ベトナム人まかせにしてしまい、その芳しくない結果を背負うことになりやすい。

例を挙げれば、ベトナム語の習得は難しいので、全てをベトナム人の通訳に頼ってしまいがちなことがある。一方、自信満々のベトナム人は、僅かに片言が話せるだけでも「日本語ができます」といってしまう。そして、彼らはメモも取らず、到底聞き取れないような内容の日本語でも流れるようにベトナム語に置き換えていくが、その中には「創作」が混ざっていることも少なくない。本来、通訳はあたかも依頼主の間の透明なガラスでなければならないが、しばしば「私が思うには」と、通訳が1人歩きをすることがあるのだ。筆者が勤めた日本語センターでは、初級と変わらないレベルでもガイドや通訳にどんどん出て行った。たしかに彼らが実践で語学を鍛えることは結構なのだが、そのマイナスの結果は我々が甘んじなければならない。

過去において日系中小企業がベトナムから撤退した時期があったが、その大

日本の対越新規直接投資(認可ベース)



ジェトロ資料より。投資件数は増加傾向だが、90年代後半には撤退も少なからず見られた。

大きな原因の一つは通訳に問題があったためである。たとえば「四日（よつか）の納期」が「八日（ようか）の納期」として伝えられるようなことが再々起き大きな損失を被っていたようだ。

以上を換言すれば、ベトナム人は依頼心が強いと言う日本人こそ、ベトナムのことを調べる際にベトナム人に全て甘えてしまうのは、いかがなものかと思われる。日本人だからといって日本の事を全て知っている人は無いのだから、ベトナム人もベトナムのことをよく知らない場合が多い。従って、ベトナムのことだからといって全くベトナム人通訳やベトナム企業にまかせにしてはならない。日本人が自ら学習・調査をするという心構えを持つべきである。

### ベトナム語の自主トレーニングの勧め

ベトナムで日本人が自ら学習すべき第一は、やはり現地の言葉である。なぜなら、日系企業でベトナム人従業員にトラブルが起きた場合、最も効果的なのは日本人が直接、意見を聞いて処理することだからである。その際、通訳を使ってもよいが、上記のような問題を抱えているので、日本人自身が基礎的なベトナム語の習得を心がけるべきである。たとえば 1~10 までの数字：モーツ (mốt : 1)、ハイ (hai : 2)、バー (ba : 3)、ボン (bón : 4)、ナム (năm : 5)、サーウ (sáu : 6)、バイー (bảy : 7)、ターム (tám : 8)、チーン (chín : 9)、ムオイ (mười : 10) を熟知しているだけでも大いに役に立つ。というのは通訳業務で重要なのは、生産高、給与、納品期日など「数」にかかわる事柄が常に問題になるからである。

ただし、学校に通ったり家庭教師に頼るだけでは必ずしも良い結果を生まな

い。なぜなら、語学は一種のスポーツのようなものであるから十分な自主トレーニングが必要なのである。自主トレーニングの具体的な方法として、たとえば 1~10 までアラビア数字で書いた小さなカードを常に身に付けておき、時間があればアトラダムに取り出して、ベトナム語で反射的に言ったり、書いたりするだけで十分な練習になる。時間をおいて 6 回以上くりかえせば、年齢に関係なく暗記し活用できるようになる。この方法を応用して、ベトナム語で表現したい日本語の短文をカードに書いて上記のように練習すると大変効果的である。話したり書けたりできる文章は、聞くことも容易になってゆく。

ベトナムは本書の第 1 章に述べたような潜在的好条件に恵まれている。そのため、ベトナム人の現在の平均月収 \$100 が月 \$300 となると、消費水準はいつきに飛躍し、購買力を備えた大市場が東南アジアで新たに出現する可能性を十分に秘めている。このようなベトナム市場には早めに進出し参入すべきことはもちろんだが、息切れしないようにすることだ。だから、長期的展望が無い企業は安易に進出すべきではない。

息切れしないためには、ベトナム文化やベトナム人の気質を習得必要がある。

ベトナム文化を習得するには、ベトナムに進出するしかない。そして、ベトナム文化の「授業」をベトナム人まかせにせず、ベトナム語の学習を含め、日本人自ら調査・研究・会得するという心構えが必要なのである。

## 【参考資料】

- Đình Quang Hải 2005 “ Bước đầu tìm hiểu về Nhật kiều ở Liên khu Việt Bắc trong kháng chiến chống thực dân Pháp [「抗フランス戦期北ベトナム連区定住日本人に関する初探」 ” , *Nghiên cứu Lịch sử* [『歴史研究』], số 11 ( 354 ), tr. 31-42.
- Đỗ Văn Tuấn 1999 “ Chiến sĩ Quốc tế trong Quân đội ta “Chiến sĩ Việt Nam mới TOSHIO, KOMAYA-Nguyễn Quang Thục [「我が軍中の国際戦士 “ 新ベトナム戦士 ” 駒屋俊夫ーゲン・クアン・トゥック」] ” , *Sự kiện và Nhân chứng* [『事件と証人』] , số tháng 10, năm 1999.
- Lâm Giang và những người khác 2009 “ Lời mở đầu [「序文」] ” , Lâm Giang và những người khác, *Tìm hiểu Thư tịch y dược cổ truyền Việt Nam* [『ベトナム伝統医薬書籍考』] , Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội, tr. 5-190.
- Buzacier, Luis, 1955, “ L’architecture militaire [「軍事技術」] ” , Bezacier , Luis, *L’art vietnamien* [『ベトナム美術』] , Editions de l’union française, Paris, pp.81-96.
- Nguyễn Thị Lâm 2009 “ Nội dung kinh điển Nho giáo ở Việt Nam qua thư tịch Hán Nôm [「漢喃書籍から見たベトナムにおける儒教経典の内容」] ” , Viện nghiên cứu Hán Nôm Việt Nam, Harvard-Yenching Institute (biên), *Nghiên cứu tư tưởng Nho gia Việt Nam từ hướng tiếp cận liên ngành* [『関連分野から見たベトナム儒家思想研究』] , Nhà xuất bản Thế giới, Hà Nội, tr. 337 - 349.
- Toan Ánh 1968 *Nếp-cũ, tín ngưỡng Việt Nam*, quyển hạ [『昔の暮らし、ベトナムの信仰』 下巻] , Nam chi tùng thư, Sài Gòn
- Thái Quý Lâm, Đỗ Hải Dũng 1984 “ Những nét chủ yếu về sinh khoáng miền Đông Bắc Việt Nam [「東北ベトナム方面における主要鉱産物の諸相」] ” , Viện Địa chất và Khoáng sản (biên), *Địa chất và Khoáng sản : Số kỷ niệm 20 năm thành lập Viện Địa chất và Khoáng sản (1965-1985)* [『地質と鉱産: 地質鉱産院成立 20 周年号 (1965 - 1985)』] , Hà Nội, tr.161-173
- 後藤均平 1975 『ベトナム救国抗争史 - ベトナム・中国・日本』、新人物往来社
- 竹田龍児 1975 「阮朝初期の清との関係 (1802-1870)」、山本達郎 (編) 『ベトナム中国関係史 曲氏の抬頭から清仏戦争まで』、山川出版社、493-550 頁
- 李 斌 1995 「永樂朝与安南的火器技術交流」、鐘少昇 (主編) 『中国古代火薬火器研究』、中国社会科学出版社、北京、147-158 頁

※ご注意

ジェトロは情報・データ・解釈等をできる限り正確に記すよう努力しておりますが、本資料で提供した情報等の正確性等についてジェトロが保証するものではないことを予めご了承下さい。

※本資料はジェトロが大西和彦氏に委託して作成しました。ジェトロは同氏の許諾を得て本ウェブサイトに掲載しています。